

津軽弘前藩の武芸(14)

——資料紹介——

太田尚充

寺山家所蔵・武芸関係古文書等(9)

目次

まえがき

内容紹介

七、諸記録等(承前)

10、『書礼文法』

冊子本

筆写本。原本の作者不詳。年記なく筆写した人物も不詳。

11、小野派一刀流由来記

卷子本

宝暦九_{己卯}(二七五九)年三月、成田保治郎定経による記録。

12、『剣術心法神妙録』

冊子本

文化六_{己巳}(二八〇九)年三月、戸田茂太夫による筆写本。

13、『武律』

冊子本

筆写本。原本の作者不詳。年記なく筆写した人物も不詳。後半の破損が大きい。

八、小笠原流諸礼（簾）（承前）

8、『簾一流之書』

卷子本

9、指物竿之書

卷子本

10、幕縫方之書

卷子本

11、鷹之書

卷子本

12、箭之書

卷子本

13、婚礼持物之書

卷子本

14、婚礼膳之書

卷子本

15、饗膳鋤之書

卷子本

16、兵法九字之書

卷子本

延宝三乙卯（一六七五）年四月、横山嘉右衛門茂基より浅利伊兵衛あて。

宝永二乙酉（一七〇五）年八月、横山嘉右衛門武基より浅利伊兵衛あて。

一〇、弓術（承前）

3、吉田流雪倚派弓術

卷子本

享保二丁酉（一七一七）年十二月、西館頂惠達雄より浅利伊兵衛あて。

4、石堂竹林流弓術

卷子本

宝暦二壬申（一七五二）年九月、斎藤新五兵衛喜備より八木橋左太夫あて。

あとがき

まえがき

今回は、記録四点、小笠原流諸礼〈騷〉伝書九点、弓術伝書一点を紹介する。

『書礼文法』は、「往来書状」と添え書きがあるように、主として朝廷や幕府の要人への書状を五十例挙げている仮綴の記録である。

『小野派一刀流由来記（仮称）』は、卷子本の体裁で一刀流小野派の流祖小野治郎右衛門に関する物語風の由来記である。

『剣術心法神妙録』の原典は、禅僧・沢庵宗彭が柳生但馬守宗矩に与えたと伝えられる『不動智神妙録』である。ただし原典には特定の名称がなかったと言われ、『不動智』『剣術法語』『神妙録』『石火機』等、さまざまに呼ばれている。（今村嘉雄編『日本武道大系・第九巻』（六〇頁・同朋社・一九八二））『剣術心法神妙録』の呼称もその一例と思われる。弘前藩家士戸田茂太夫はこれを筆写し、心法鍛練に励んだものであろう。

『武律』には「本多忠勝授息男及家臣」と添え書きがあるので、もともとは「本多忠勝」が所持していた軍法の書と思われる。これに著者自身の所見を加えたのが『武律』である。ただし著者は不詳である。

「小笠原流諸礼（躰）」の九点は、何れも横山嘉右衛門が浅利伊兵衛に授与した伝書であるが、破損が大きく判読が困難であった。それで複写したものをそのまま掲載することにした。

弓術二点のうち「石堂竹林流」の伝書は、斎藤新五兵衛より八木橋左太夫あてになっている。他人あての伝書を浅利家が所蔵するようになった経緯は不明であるが、浅利家にはこのように「浅利」あてでない伝書が幾つかある。おそらく武芸に関心の深かった浅利家の代々では、武芸伝書を収集していたのではないかと思われる。

内容紹介

凡例

- (1) 表紙に外題のある場合は『』にその題名を記した。『』のない題名は、内容をその他から推して仮につけた名称である。
- (2) 紙質や縦・横の大きさ等は、資料紹介として特別必要と思われる限り省略した。
- (3) 特定の人物、特殊な字句等は本文の後に「注」で示し、全体にかかわる事情等について「解説」で説明を試みた。また、文中に「注」が必要な場合は（一）内に示した。
- (4) 読み難い長文の場合には清音の「かな」に濁点を打ち、また段落、句読点をつけた。
- (5) 判読不明な文字は□で示した。
- (6) ※印のある写真は、本書の最後に一括して掲載した。

七、諸記録等（承前）

10、『書禮文法』 写真(1)

往来書状

冊子本

①

新春之御慶不可有愚御座候。

公方様益御機嫌能被成御座、元日、二日、三日御表出御
年始之諸御礼首尾好相濟申由、乍恐目出度奉存候。為可
奉伸御祝儀呈使札候。恐惶謹言

正月 日

②

一筆致啓上候。

公方様益御機嫌能被成御座、年始之御規式如御嘉例、首尾好相濟候由承知仕、乍憚目出度奉存候。此段為可申上
各様被捧飛札候。恐惶謹言

正月 日



写真(1) 『書禮文法』の書き出しの第1頁。

③

為年頭之御祝儀、以使者御太刀一腰、御馬代黄金十兩献上之仕候處、首尾能披遂御披露旨被成御奉書置奉存候。

恐惶謹言

正月 日

④

役属之御慶賀不可有休期御座候。

公方様益御機嫌能被成御座、年始之御禮如恒例首尾好相濟恐悅至極奉存候。次貴様弥御堅固可為御超年目出存候。為御祝儀若斯御座候。猶永日可申承候。恐惶謹言

正月 日

⑤

一筆致啓上候。

公方様益御機嫌能、去月十一日聖堂ミヤトウ江披遊御成、悠々被成御座、及暮被成還御候由、恐悅奉存候。因茲棒愚札候。

恐惶謹言

月 日

⑥

一筆致啓上候。

公方様益御勇健被成御座去月十七日東叡山御宮御社参、同廿日同所御佛教江被遊御参詣、御機嫌能還御之旨、恐悦至極奉存候。此段為可申上呈愚札候。恐惶謹言

月 日

⑦

一筆致啓上候。

公方様益御機嫌能被成御座之旨遂々承知仕、恐悦奉存候。然者私儀為参勤去月廿五日国元出船仕、今日伏見致到着候。此段為可申上捧飛札候。恐惶謹言

月 日

⑧

一筆致啓上候。

公方様益御機嫌能被成御座之旨追々承之、恐悦至極奉存候。然者私儀首尾好被下御暇餘、色々拝領仕難有次第奉存候。今日國元致到着、依之為御禮目錄之通進上之仕候。可然様御披露奉喚候。恐惶謹言

月 日

⑨

一筆致啓上候。

公方様益御機嫌能被成御座之旨、恐悦奉存候。然者私儀今度帰國仕候ニ付、為御禮先頃以使者目録之通致献上之候處、(原文のまま)○○○首尾能被逐御披露被成御奉書、殊使者御帷子單物拝領仕、冥加至極奉存候。為御礼如此御座候。恐惶謹言

月 日

⑩

一筆致啓上候。

公方様益御機嫌能被成御座之旨、遂々承之恐悦奉存候。猶以為可奉窺御様躰、以使者申上候。随而御看一種進上之仕候。不苦思召候者、可然様御披露奉頼候。恐惶謹言

月 日

⑪

端午之御祝儀就差上候被成下御内書、謹而頂戴之難有次第奉存候。殊使者時服拝領仕、重畳冥加至極奉存候。為御礼各様迄如斯御座候。恐惶謹言

月 日

⑫

一筆致啓上候。

公方様益御機嫌能被成御座、恐悅奉存候。然者私參勤之儀奉伺候処、被達上聞、来年四月中參府可仕由被仰出之旨、被成御奉書奉得其意、忝仕合御座候。為御請捧愚札候。恐惶謹言

月 日

⑬

一筆致啓上候。

公方様倍增御安泰被成御座旨、恐悅至極奉存候。猶以為可奉伺御機嫌之御様躰、以使札申上候。恐惶謹言

月 日

⑭

一筆致啓上候。

公方様倍御勇健能被成御座候、去月九日小石川御殿江被為成、天氣快晴、及晚景御機嫌能被成還御之旨、乍憚目出度奉存候。依之呈愚札候。恐惶謹言

月 日

⑮

一筆致啓上候。

公方様益御機嫌能被成御座旨、恐悅奉存候。然者為年頭之御祝儀、御太刀一腰、御馬代黄金十兩進上仕候。明春可然様御指図頼入存候。恐惶謹言

月 日

⑬

一筆致啓上候。

公方様益御機嫌能被成御座、去月十一日勅使被成御對顔、翌日御振廻、御能被仰付之、首尾殘所無御座旨承、乍憚目出度奉存候。因茲各様迄以使札申上候。以御序可然様御取成奉喚候。恐惶謹言

月 日

⑭

一筆致啓上候。

公方様倍御機嫌能被成御座、去月十一日被為執御前髮候。為御祝儀御表江被成出御、御一門方諸大名并三千石以上之面々、以御太刀目録御礼被申上、十五日御能被仰付之由及承。乍恐重疊目出度奉存候。依之以使札申上候。

恐惶謹言

月 日

⑮

一筆致啓上候。

公方様益御機嫌能、去月十八日勅使御對顔、將軍宣下之御作法、無残所相濟、同廿七日御一門方諸大名御旗本之面々、御祝儀之御禮被申上候由、目出度御樣軀珍重之御事、不過之奉存候。次私名代之使者、御太刀目録首尾好差上之、各樣御執持与忝存候^(ト)。為御礼如是御座候。恐惶謹言

月 日

⑬

一筆令啓上候。

公方様倍御機嫌能被成御座候哉、乍惶承度奉存候。以私儀昨日参内院参、御祝儀等首尾好差上之、萬御作法残所無之、恐悅之至奉存候。其上於禁裏仙洞新院御所天盃致頂戴、難有仕合冥加至極奉存候。右之趣可然樣御披露賴存候。恐惶謹言

月 日

⑳

一筆致啓上候。先以

公方様益御機嫌能被成御座旨、恐悅奉存候。然者今日繼飛脚之使、以愚札申上候。私儀昨六日、禁裏仙洞女院御所女御御方江参内院参仕、首尾好^{チヨクゼツ}勅誼、院宣被仰出之^{セン}、被下御暇候。其節御太刀致拝領可被任^{マカセ}正四位下左少将之旨、而傳奏衆之仰渡候。於法皇御取御料理被下之、其上御煮物御規^{キヨキ}御文臺等頂戴仕、於新院御所御屏風拜戴

之、重疊難有仕合奉存候。雖然官位昇進之儀不得上意而難及御請之由申上候。明後九日、本院御所、女院御所可被下御暇之旨御座候間、近日爰許発足可仕候。依之各様迄以愚札申上候。恐惶謹言

月 日

②①

一筆致啓上候。

若君様被成御誕生

公方様御満悦乍輕奉推察、寔以千秋万歳、目出度御儀一天下之大事不過之、恐悦奉存候。依之為御祝儀公方様江

御太刀馬代、若君様江御腋刺一腰、来國光、御腰物備前長光目錄之通并御樽肴進上之仕候。可然様御指図頼候。

委曲⁽¹⁾黒田左門申含置候。恐惶謹言

月 日

②②

一筆致啓上候。去九日

若君様被遊御宮参、天氣快晴、萬御規式御作法殘所無御座相濟申由、誠以珍重不過之奉存候。

還御之節、井伊掃部頭方江被為成、御機嫌能被成歸御之旨

公方様不大形御満悦可被思召与目出度御儀恐悦奉存候。就夫、為御御祝儀以使者兩上様江目錄之通獻上之仕

候。宜様御指図頼入存候。猶斯後喜之節可得御意候。

恐惶謹言

月 日

②③

一筆致啓上候。私領内去年作毛損失付、人民及飢饉⁺之段達上聞、御兵^(根)養過分被借下、家人百姓以下悉配分仕、萬民身命扶候儀、廣太之御慈悲、誠以難有仕合奉存候。因茲、為御礼各樣迄以使者申上候。恐惶謹言

月 日

②④

御奉書致拝見候。

公方様当四月、日光就御社参供奉可仕之旨上意之由、畏奉存候。私儀内々從是申上御供仕度奉願候處、被仰出難有仕合奉存候。就夫、来三月、参府可仕之由、是者奉得其意候。為御請如斯御座候。

月 日

②⑤

一筆致啓上候。今十八日朝覲⁺之行幸相整、御規式御作法殘所無御座、將軍様御機嫌不大形御事候。誠以公私之大幸不可過之、目出度御儀奉存候。右之御序宜頼御披露候。恐惶謹言

月 日

②6

一筆致啓上候。

公方様倍御勇健被成御座、去十七日御祭礼御執行、其後御参詣、勅使院使御對顔、本坊江渡御、於彼室御膳被召上之、十九日出御堂曼陀羅供之、御法事公家門跡方着座被拜有之、各進出之後御参詣、一昨廿日、勅使院使参堂着座、御經奉納之被遊御参詣、御拜殿御着座、尾張黃門、紀井相公、水戸相公程候。(中納言)(参議)御經供養之御法事相濟、奥院江御参詣、打續晴天、萬端御作法無残所御機嫌能為還御、昨日御山出御之由、委細預永之趣致承知、誠以珍重之御儀奉存候。自然御序之刻、可然様御助言所庶幾候。(こゝろが)恐惶謹言

月 日

②7

御奉書致拝見候。 来年於日光

大猷院様御廟所石垣御普請有之付、石寄之儀被仰付難有仕合奉存候。 因茲、酒井讃岐守奉之、舟越三郎四郎、石尾七兵衛、北條新藏奉公人候間、可申談旨奉得其意候。 恐惶謹言

月 日

②8

貴簡致拝見候。 当地益御静謐、目出度思召之由得其意存候。 将又参内被有之仰之趣、御奏達之旨承届候。 今度御在府中御馳走御満悦之由、尤之御事御紙面之通及高聞候。 次御滞留中御奔走仕儀も無之、本意之外奉存候。 猶

斯後序之時候。恐惶謹言

月 日

②9

一筆致啓上候。以武田道安昨五日此地被致下着候。被加上意候故早速被罷下難有仕合奉存候。以御威光本腹可仕与寔以辱奉存候。則藥致服用無油斷養生仕候。為御礼各樣迄以使者申上候。恐惶謹言

月 日

③0

御奉書謹而致拝見候。然者当八月朝鮮信使来朝付、私領土内罷通候節、萬馳走之事可為如去未歲之趣并来朝之人數書付、從宗對馬守先達可被差越由、膳部献立別紙被遣之、奉得其意候。自然彼船遭風波之難、相定泊之外何之地江着岸仕候共、綱錠水薪等不滯樣、自前廉可申付旨、是又畏奉存候。

月 日

③1

今度紅葉山御宮就御造畢、去十六日正遷、十七日公方樣御束帶被成御參詣、勅使、院使、奉幣使、日光御門跡、妙法院御門跡、毘沙門堂御門跡御法事御執行。天氣迄能相濟、御機嫌不大形被成御座旨日出度奉存候。依之各樣迄如是御座候。恐惶謹言

月
日

③2

一筆致啓上候。

公方様御庖瘡大形被成御収醫、^マ₇⁽³⁾打續御膳被召上、御機嫌残所無御座、天氣次第可被為掛御酒湯御様躰之由、恐悦至極奉存候。猶以為可奉伺之呈飛札候。恐惶謹言

月
日

③3

一筆致啓上候。

公方様倍御機嫌能被成御座付、目出度奉存候。然者禁中御殿之御作事御造畢、去二日、就吉辰傳奏衆其外御役人、公家衆江御殿引渡申候。来廿日弥被遊御徒移御沙汰御座候。右為可申上捧飛札候。恐惶謹言

月
日

③4

一筆致啓上候。貴様御儀今度御字并松平之御称名御拝領、其上被叙四位之役、御宮名且又御腰物御拝領之由承之、重疊目出度存候。依之為御祝詞御太刀馬令進覽之候。恐惶謹言

月
日

③5

貴札致拝見候。如仰拙者儀海陸無恙去月廿五日致参府、翌廿六日為上使松平伊豆守殿被成下、同廿八日令登城、首尾好遂御目見難有次第奉存候。為御悅預永忝存候。恐惶謹言

月 日

③6

一筆令啓達候。弥可為御無事珍重存候。然者拙者儀、驛路無恙致参府、首尾好御禮申上令大悅候。將又先頃御領内罷通候之節、道筋掃除等被仰付、且又旅宿迄御使者殊御肴両種被懸御意、御家来衆被附置、色々御馳走之段忝存候。為御礼以飛札申入候。猶斯後喜之時候。恐惶謹言

月 日

③7

一筆令啓上候。

公方様弥御機嫌能被成御座、恐悅奉存候。次貴様御無事可為御在府、目出度御事候。將又拙者儀、今度首尾好御暇被下之、其上色々致拝領難有奉存候。道路無事今日國元令到着候。因茲、為御禮御老中迄以使者申上候間、如斯候。猶斯後喜可得御意候。恐惶謹言

月 日

③⑧

一筆啓上仕候。

公方様増御機嫌能被成御座候哉、乍恐承度奉存候。將又私儀今已刻致京着、牧野佐渡守所江罷越對話仕、其後禁中御作事手傳衆、同奉行中江上意之趣申渡候。何茂冥加至極奉存候旨追御請候。此段為可申上捧愚札候。恐惶謹言

月 日

③⑨

一筆致啓上候。

公方様倍御機嫌能被成御座候旨、恐悅奉存候。然者私儀今度御即位之御使相勤候二付、可被任少將之旨以傳奏衆被仰渡候。此趣以御序可然様御取成奉頼候。委細者從稻葉丹後守可有注進候。恐惶謹言

月 日

④⑩

一筆致啓上候。

公方様御咳氣早速被成御快然、去廿三日御表江出御、愈御機嫌能諸御礼相濟候由、乍憚目出度奉存候。猶更為可奉伺御様躰、若是御座候。恐惶謹言

月 日

④1

一筆啓上仕候。

公方様益御機嫌能被成御座、奉恐悦候。当御山無別条、御宮、御堂御安全、坊舎町等迄替儀無御座候。随而日光御門跡、毘沙門堂跡、為^ゐ蹄寺今朝御發駕之儀候。猶遂々可申上候。恐惶謹言

月 日

④2

去五日之御奉書致拜見候。小諸城来廿一日、青山因幡守方可被相渡候間、其節罷越請取之勤番可仕之旨、奉得其意候。将又彼地為御目付櫻井庄之助、青山善兵衛被仰付候由承知仕候。萬事可申談候。委細從彼表可申上候。

恐惶謹言

月 日

④3

一筆致啓上候。

若君様去三日被遊御元服、大廣間出御、勅使御對顔、從三位大納言御任叙之宣旨并正三位御推叙御位記御頂戴、畢而御一門方、諸大名、御旗本之面々兩上様江御目見、入御之後紅葉山江大納言様被成御社參、還御、於御黒書院三獻御祝、紀新太夫御太刀新身藤四郎大納言様江被進之、御作法殘所無御座相濟、公方様御機嫌不大形旨、從御老中被仰下、乍恐目出度奉存候。随而貴様之事御加冠之御役御務被任中將、保科肥後守殿理髮之御役勤少将被

仰付之旨、珍重之御儀存候。猶斯後喜之時候。恐惶謹言

月 日

④④

一筆致啓上候。

公方様倍御機嫌能被成御座候旨、恐悅至極奉存候。然者今度私儀不存寄御加増致拝領、御暇之節御懇之上意、於御國御年自御茶被下之、其上四位侍從任叙御腰物御馬并黃金、御帷、單物拝領仕、其以後被成下御糸目御召之御羽織頂戴之、重疊難有仕合奉存候。今日在所到着仕候間、先為御礼各様迄以使札申上候。恐惶謹言

月 日

④⑤

去月廿六日之御奉書致拝見候。

禁裏江為□□之御祝儀、御太刀御馬就進獻之為上使上杉伊勢守傳奏衆迄罷越差上之候処、獻感不斜之由御座候。

依之女房之奉書傳奏衆折紙并打枝橘御銚子提大高檀紙被進之候間、差越申候。猶斯後喜之時候。恐惶謹言

月 日

④⑥

松原伊豆守殿卒去之儀承之給言語察入候。

公方様御愛惜之段、乍恐奉推察候。因茲、為奉窺御機嫌、以飛札申上候。恐惶謹言
月 日

④7

一筆啓上候。紅葉山御宮、御堂修理出来、去十六日御遷宮、十九日就御入佛、十七日廿日被成御參詣之由、乍恐連續目出度奉存候。依之各様迄呈愚札候。恐惶謹言

月 日

④8

一筆致啓上候。

公方様益御機嫌能被成御座之旨、乍恐目出度奉存候。然者私病症大切之段達上聞、同苗隼人正御前江被召之、拙者病躰為看病被下御暇、今七日致參着、上意之趣奉承知、誠以難有次第奉存候。因茲、為御禮以使者申上候。自然御序之刻可然様御執成奉頼候。恐惶謹言

月 日

④9

芳札殊御被頂戴之并長蛇被相送之欣然之至候。⁽⁴⁾依之御最花銀子百枚令神納之候。愈於神前御祈禱頼入候。次貴殿無別条之旨珍重候。恐惶謹言

月 日

⑤①

写真(2)

御奉書致拝見候。明廿四日増上寺御佛殿江被遊御参詣候間、行列之御先江致参上、束帯装束着之御供可仕之旨奉得其意候。恐惶謹言

月 日

注(1)

委曲(いさやく)

詳かなること。

(2)

朝覲(ちようぎん)

天皇が太上天皇や皇太后の御所に行幸し、恭敬の

礼をつくすこと。

年頭の恒例の儀と踐祚、即位、元服の後に行われる臨時の儀とがある。

(3)

収醫(しゅうい)

腫れものの表面が乾くこと。

(4)

芳札(ほうさ)

他人の手紙の敬称。

11、小野派一刀流由来記

卷子本

である。段落を設け、句読点をつけた。

前半部切れているので、判読できると

ころから書き記す。

卷子本の形式であるが内容は記録もの

写真(3)

其奥ハ唯劔戟、弓馬、刀鎗の外を出す。然ニ刀脇差ハ尊

日斗共に昼夜身をはなさざるハ、止事を得ざる為なり。

(習)

かるがゆへに、士たる者ハ此術をならわずといふ事なし。



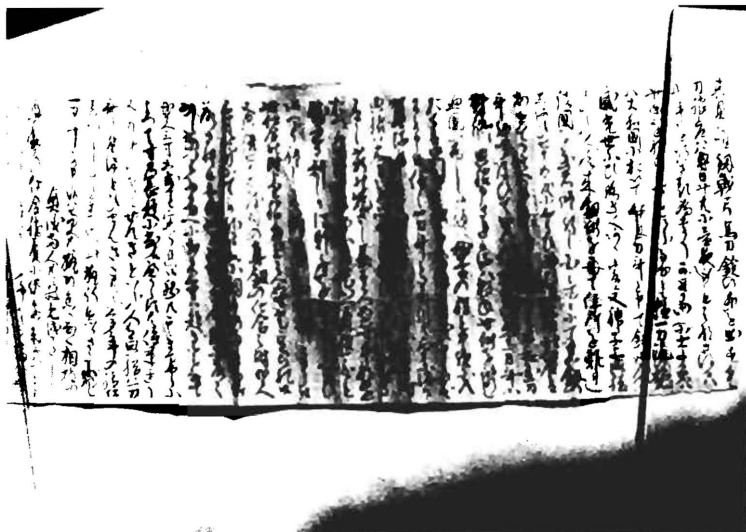
写真(2) 『書禮文法』の最後の一頁。

(そもそも) 抑一刀流の根元ハ、大和国において、伊藤一刀齋⁽¹⁾と申て剣術名人の威光、世にひろき人あり。

爰ニ又、神子上典膳⁽²⁾といふ人、年来剣術を尋て住所を離れ、諸国を武者修行し、国々所々にて真劍のしあひ七十五度におよび、刃びき木刀^(引)の仕合はあけてかぞへがたし。

いよく執行し、大和国一刀齋を聞及びて、かの住所に尋至り、一刀齋に對談し、典膳申されたるハ、数年此術を修行し廻国いたし候^(ねがわく)。願ハ稽古の程も御覽に入たくば、御門弟と成て当流の奥義をも承度旨被申候。依之一刀齋も承引し、望にまかせ罷るべしとて、すでにしあひに定し時、典膳ハ木刀を以て立向ひ、一刀齋ハ爐中に有し薪の焼さし、長一尺五六寸斗なるをおつ取て、仕合^(ばかり)数度に及といへ共、典膳一度も勝れざりしかば、則座を去てうやまひ^(敬)、あつく礼して師弟の約を成し被申候。

此仕合の時より脇差一尺五寸と定られ候。又、典膳七十五度目の真劍の仕合の時、式尺三寸の刀にて被致候処に、相手の両手を打落され候に、向の刀の切先眉間に落^(みけん)



写真(3)「小野派一刀流由来記」の書き出しの部分。右の方は切れている。

て少し当りたるゆへに、忒尺三寸ハ短きと知て忒尺三寸五分と定られ候。然共、其きりやうによつて寸の長短に寄ルベからず共、傳來れり。

又、一刀斎の弟子ぜんき(善鬼)といふ人有。典膳ハ一刀斎付まとひ、ぜんきと共に多年の給仕真切にして、劍術の執行、怠りさらになし。一刀斎被申候ハ、兩人共執行怠りなく相極たり。然共当流の奥儀兩人共二赦免成がたし。

真劍の仕合勝負に仍て赦免可有被申候。依之、師命もだしがたく兩人真劍の仕合に、ぜんき(善鬼)うたれ候。則神子上典膳、一刀斎の許状を請継(うけつぎ)、多年の深望をかなひ、歡喜不斜。夫ハ一刀斎ハ行方知らず。

此後典膳ハ当流天下に流布し、武士の重宝となさしめん為、武州江戸に下り、神田旅籠町といふ所に纔(わずか)の借宅住居し、天下一流一刀根元神子上典膳、懇望の衆中是被尋といふ勘判(看板)を出し置かれ候。誠成かな、徳不狐(とくはこならず)とハ。

御代は台徳院秀忠公の御時なれば、大坂表におゐて武功のほまれ有御簾本大久保彦左衛門(徳川)横田沢助兵衛(4)長坂血鎧(6)、小畑勘兵衛兼て典膳を聞及び、序ニも有ば、か

の劍術を心みむとおもわれ候。折節神田駿河台の小畑勘

兵衛宅ニて、右の衆中團合の座ニて勘兵衛被申候は、旅

籠町に天下一流の勘判(看板)を出し候神子上典膳といふは、幸

我等宅より程近候間、明朝彼者の方へ尋、様子をも心見

んと被申候所に、何も可然由詮儀して、則勘兵衛翌朝未

明に食事を認、神田旅籠町、この宿所を尋行かれ候所に、

典膳唯今起たりと見へて、紙子(8)を着し對面せられしかば、

勘兵衛ハ、勘判(看板)の趣物語りし、仕合望ニて参りたるよし

被申候得ハ、心易御事候。いまだ朝の食事いたさず候、

其程御待可有とて、手づからやくわんニ米を入、是を粥

ニして心静ニ済して被申けるハ、さすが天下ニかくれ無

勘兵衛事ニて候へバ、真劍、刃引、木刀、いづれニても

御心次第にまかせ候と被申候。勘兵衛木刀ニて致し可申

とて中太刀おつ取立られければ、一刀斎初て典膳と仕合の

ごとく、爐中の焼さし一尺五六寸の木を以て仕合度々に

及ぶといへ共、勘兵衛一度一度も勝なし。勘兵衛被申候

ハ、典膳の名人言語ニ絶(きわまる)ニ、此上ハ御弟子に成可申と約

束して帰られ候。以後右團合の衆中江典膳の事物語りし、

何も師と御たのミしかるべきよし被申候由、此衆中見聞
及たり。大名簞本弟子ニ成て典膳の名天下にかくれなし。
漸々秀る。

其頃山上大蔵と申人有。劔術の達人とて世にほまれも
てなしたる人なり。典膳もかねて公方の達上聞にければ、

為上意と大蔵、典膳兩人真劔の仕合おふせ付られ、則江
城の追手下馬さきニおゐて、もがりを置、四方張番を置、

其内ニてのしあひ、典膳勝ていよく世上に誉高し。則
(仕合)

秀忠公より典膳を被召出奉行拝領し、御簞本にはいくわ
し、小野治郎右衛門と家名を改られ候。今一刀流ノ元祖
是なり。

成田保治郎定経⁽¹⁾

(一七五九)

写真(4)

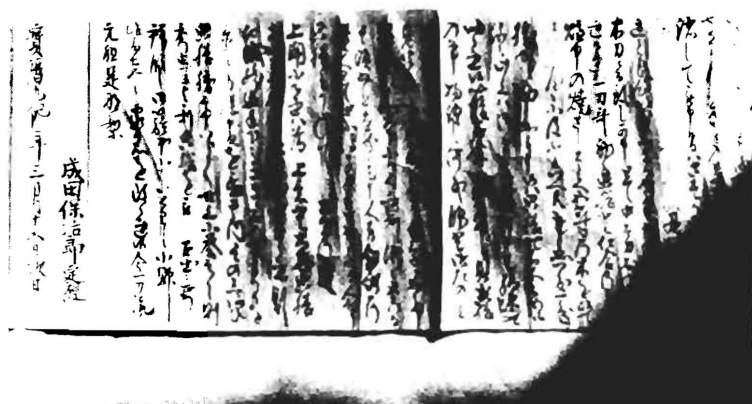
寶曆九己卯年三月十五日次日

注(1) 伊藤一刀斎。伊藤一刀斎景久のこと。一刀流の流祖。

今村嘉雄著『日本武道大系・第二巻、劔術(二)』

(同朋舎、一二七頁、一九八二)に諸説による経歴の概略を述べている

が、「生国、生年、経歴、没年、終焉の地等、いづれも
信憑すべき史料が見当らない」としている。



写真(4) 「小野派一刀流由来記」の最後の部分。

- (2) 神子上典膳。のちの「小野治郎右衛門忠明」である。伊藤一刀斎景久に学び奥義をきわめ、文禄二年（一五九三）徳川家康に二百石で召され、徳川秀忠の剣法の師となり、小野姓に改めた。寛永五年（一六二八）十一月七日江戸で没す。
（「日本武道大系・第（二巻）既出、参照」） 小野派一刀流の祖といわれる。
- (3) ぜんき。善鬼。伊藤一刀斎景久の弟子。神子上典膳との勝負については『本朝武芸小伝』（「新編武術叢書」所収、七〇頁、人物往来社、一九六八）に詳しい。
- (4) 大久保彦左衛門。（二五六〇—一六三九）
- (5) 横田沢助兵衛。不詳。
- (6) 長坂血鎧。長坂血鎧九郎のことと思われる。（一—一五七二）
- (7) 小畑勘兵衛。小幡勘兵衛景則（景憲）（一五七二—一六六三）後に小野治郎右衛門忠明の弟子となる。
（「かみ」） 紙子。紙で仕立てた衣服。厚手の和紙に柿渋を塗って乾かし、もみ柔らげたもので仕立てる。安価なので近世では貧しい人々の間で用いられた。
- (8) 山上大蔵。不詳。
- (9) もかり。虎落。（「かみ」） 竹を筋かいに組合せて縄でしばった柵、垣根。
- (10) 成田保治郎定経。不詳。

解説

1、一刀流の創始者は伊藤一刀斎景久であるが、本資料では、とくに一刀斎景久の弟子・神子上典膳、のちの小野治郎右衛門忠明についての記述を意図しているようである。ただし内容は、確実な史料に基づいているとは言い難く、むしろ物語性が強い記述が多い。

例えば、本資料では、神子上典膳は徳川秀忠に召し出されたとあるが、今村嘉雄は「文禄二年（一五九三）徳川家康に二百石で召され、秀忠の師となり、小野姓に改めた」としている。
（「日本武道大系・第二（巻）既出、一二頁」） また『本朝武芸小伝』（「既出、七二頁」）では、典膳が剣の指導を受けた秀忠が、その精妙なる剣を賞し「諱の字を賜ひ、忠明と号す」としている条を見落している。本資料は宝暦九年（一七五九）の作であるが、『本朝武芸小伝』は天道流日夏繁高により享保元年（一七一六）の刊行である。当時、武芸に関心のあるものは第一に採りあげるべき書と云われているにもかかわらず、これを採りあげていない。

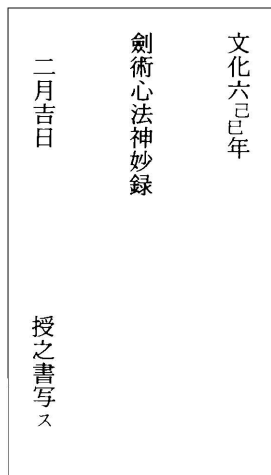
2、大久保彦左衛門、横田沢助兵衛、長坂血鎧、小畑勘兵衛は同時代人ではあるが、本資料にあるように四者談合したという記述の事実は信じ難い。著名な人士を挙げたに過ぎないと思われる。ただし、小幡勘兵衛景憲は小野治郎右衛門忠明の門弟の一人であったことは事実で、一刀流伝系にこの事が示されている。(『日本武道大系 第二巻』既出、一三八―一二九頁)

3、伊藤一刀斎景久は、自ら「一刀流」という流名を使わなかったようであるが、小野治郎右衛門忠明以後、この系列の流名をとくに「小野派一刀流」と称している。津軽弘前第四代藩主津軽越中守信政は、小野派第三代同治郎右衛門忠於に学び、心技ともに門弟中随一と言われ、印可を許されている。この系統を小野派一刀流「津軽系」と称され、笹森順造を経て現在笹森建美が継承している。平成元年（一九八九）八月二十七日、弘前市立体育館で行われた「弘前市市制百周年記念・日本古武道弘前演武大会」で、「第一七代宗家・笹森建美」が小野派一刀流の「松拾刀、高上極意五点、立合抜刀」の剣技を門弟を従えて演武披露している。

12、『剣術心法神妙録』

冊子本

表紙
写真(5)



写真(5) 『剣術心法神妙録』の表紙。

剣術心法澤庵之神妙録

箇條目錄

写真(6)

- | | |
|---------|-----------|
| ①無明住地煩惱 | ②諸佛不動智 |
| ③理事修行 | ④間不容髮 |
| ⑤電光石火機 | ⑥心置所 |
| ⑦本心妄心 | ⑧有心無心 |
| ⑨水上打葫蘆子 | ⑩應無所住而生其心 |
| ⑪覓放心心要放 | ⑫前後際斷 |

無明住地煩惱

無とハ、あきらかなしと申文字にて候。迷ひを申候。住地とハ、止^{ト、マル}位と申字儀にて候。佛法修行に五十二位と申事候。五十二位之内、毎々心の止るを住地と申候。住ハ止ると申儀理にて候。とゞまると申ハ、何事に付ても其事に心の止るを申候。劔術之上にて申さバ、向より斬る太刀を一目みて其儘そこに止り、向より伐る拍子に合せんとおもへバ、向ふの太刀に其儘心が止り候て、手前之働がぬけ候て向ふの人に切られ候。是を止ると申べく候。向より打ツ太刀を見るに、見る事ハ見れどもそれに心をとゞめず、向ふの打ツ太刀の拍子に合せて打ふとも思はず、思案分別にも渡らず、ふり上る太刀を見るといなや心を卒度^{そと}もとゞめずして其儘つけ入て向ふの太刀に取つかバ、我方へおつとつ^(振)



写真(6) 『剣術心法神妙録』の書き出しの頁。

て還て向ふを切る刀となるべく候。禪宗にハ、是を還て地鎗頭を倒に刺人を切ると申候。鎗ハほこにて候。人の持たる刀を我方へおつ取て、還而相手を切ると申す心にて候。劔術之上にては、無刀の刀と申にて候。向から打つも、左からうつも、右からうつも、打つ人にも打太刀にも拍子にも卒度も心をとゞめバ手前之働、皆ぬけ候て人に切られ可申候。敵に心を置けバ敵に心を取られ、我身に心おけバ我身に心を取られ候間、我身にも心を置くべからず候。我身に心を置くも初心の間の事なり。太刀に心をおけバ太刀に心を取られ、拍子合ニ心を置けバ拍子合に心を取られ、我か打太刀に心を置けバ夫に取られ候。これ我心のとゞまりて手前のぬけ申すになるべく候。劔術者ハ竟可有候。佛法と引当て申事にて候。佛法ニハ此の止る心を迷と申候。故に無明住地煩惱と申事にて候。

諸佛不動智

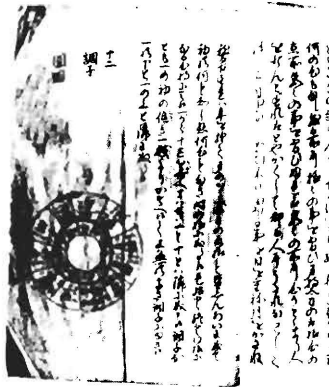
不動とハうごかぬと申文字にて候。智ハ智慧の智にて候。うごかぬと申て、石か木かのやうに無性なる義理にてハなく候。向ふへも左へも右へも十方八方へも心ハ動きたきやうに動きながら、そつともとゞまらぬ心を不動智と申候。不動明王ト申て、右手に劔を握り、左手に繩をとつて齒をくひ出し、眼をいからかし、佛法をさまたげん惡魔を降伏せんとてつつ立て居られ候姿も、あのやうなる姿なるか。何国の世界にかくれて居られ候ニてハなく候。形ハ佛法守護の形を作り、體をば此の不動智を躰として衆生に見せたるにて候。一向之凡夫ハ見て恐れをなし、佛法に懼をなさんとおもひ、さとり(悟)に近き人ハ不動智を表したると心をさとり、一切の迷ひをはらし、則不動智を明め傳れバ、我身則不動明王なる程に、此の心法を能々修行したる人ハ、惡魔もなやまさぬぞと知らせんが為の不動明王にて候。然バ、不動明王と申も人の一心のうごかぬ處を申候。我心を動轉せぬ事にて候。動轉せぬとハ物に心をとゞめぬ事なり。物に心をとゞむれバ物に心をとられ、物毎に止る心をうごく(何故)と申候。物を一目見ても、心を止めぬを不動と申候。なぜに

なれば、物に心が止まれバ色々の分別が胸に候て、心いろ／＼に動き候。止まれバ動き止まらぬ心ハ、動いてしかも動かざるにて候。たとへ八十人して一太刀宛太刀に入るに、一太刀請流して跡に心を止めず、跡を捨て跡を捨て候ハ、⁽⁵⁾十人ながらに働を^(欠)かゝぬにて候。十人に十度心ハうごけども一人にもとゞめずバ、そこ／＼へ⁽⁶⁾取合て働きハ^(かき)欠申まじく候。若又、老人の前に心が止まらバ一人の打太刀を請流べけれ共、二人しての時ハ⁽⁷⁾手前の働がぬけ可申候。千手観音にハ手が千御入候に、弓を持ぬる手も有、鉾を持も有、劔を持たるもあり、様々御入候。若弓を取る手に心が止まらバ、九百九拾九の手ハ皆用に立間敷候。一所に心を止めぬゆへに千の手が一もかけず用に立候。観音とて、身ひとつに千の手が何としてあらんや。不動智が開け候得バ、其身に手が千ありても皆用に立てと人にしめさん為に作りたる形にて候。綴バ一本の木に向て、其内に赤葉⁽⁸⁾ヲを見て居れば餘の葉は見得ぬなり。葉ひとつに目をかけずして只一本の木に何となく打向見れば、数々の葉残らず見へ候。葉ひとつに心をとめ候へバ、それ⁽⁹⁾に心をとらるゝにて候。一所に心をとゞめぬといふころを得心したる人は、則千手千眼の観音にて候。然を一向の凡夫ハ、只一筋に身一ツに千の手千の眼がまします寔に難有と信じ候。又なま物知りなる人ハ一身に千の手千ノ眼が何しにあらんと破るなり。⁽⁷⁾今少し物を知れば凡夫の信ずるにてもなし。破るにもなし。道理を能得心ノ上にて尊び信じ候。佛法は物によそへ^(装)物に表して道理をあらハす事にて候。諸道共にか様の物にて候。神道など別して其の道理にて候と見および申候。あ^(及)りのまゝに思ふも凡夫、又打やぶるハ猶あしく候。其の中に道理ある事に候。此の道彼ノ道様々に候へども、極る所は一心の落着にて候。扱、初心の住地より能修行して不動智の位にいたれば、立かへつて元の住地の初心の位へ落る子細御座候。劔術にて申べく候。⁽⁸⁾始は身持も太刀も構へも何も知らぬ者なれば、身にも心にとゞまる事なく、人がうて^(打)バついたりあハせたばかりにて、何の心もなし。然る所に様々の事を習ひ、身持太刀の取様、心の出所、色々の事を習ひぬれば、色々の所に心がとゞまり、人を打んとすればとやかくして、却而人にうたれなどして殊外不自由なり。

如斯不自由なる事を、日を重ね月をかさね稽古すれば、年を経て身のかまへ、太刀の取様も皆しんあいに成て、初の何も知らぬ何心もなき時の様に成り申候。是始と終とは同様になる心持にて候。一から十迄算へまハセバ、一と十とハ隣に成申候調子なれども、一の初（低き）一越（数）よりかぞへ候て、上無（かみむ）の高き調子にゆき候へバ、一の下と一の上と隣に成り候。

十二調子 (10)

圓圖
写真(7)



写真(7) 『剣術心法神妙録』の「十二調子」の「圓圖」のある頁。

づつと高きとづつとひき（低）とハ、似たるものに成申候。佛法も、づつとたけ候へバ佛も法も知らぬ凡夫にひとしきものに成候て、物知とハいへども何も知らぬ人の様に人々見なす程にかざりも何もなくなる物にて候。故に始の住地の無明煩惱と後の不動智をひとつに成候。智慧（慧）働きの分ハうせはてて、無心無念の位に落着申候。愚智の凡夫は一向

智恵^(慧)のなき故に出ぬなり。づつとたけたる智恵^(慧)は、はや智恵^(慧)がいらぬになり、一切出ざるなり。なま物知りなるにより、智恵^(慧)が顔へ出申候ておかしく候。

理修行事修行

理とハ右申ごとくいたり^(至)てハ何もととりあへず、只一心のすてやうにて候。しかれども、事の修行と申ハ劔術の上にて申候。⁽¹²⁾身かまへ三箇九箇の様々の習の事にて候。理を知りても事を自由に働かさねば成らず候。身持太刀持よく候ても、理の極る所聞く候ハ^(くら)成まじく候。事と理との二ツハ車の両輪のごとくたるべく候。一心に能く納めて手足身の稽古いたすべし。

間不容髮

間に髪を容ずとハ、劔術にたとへて申セバ、⁽¹⁴⁾間とハ、物を二重合せて其際へハ、髪筋も入れずと申儀にて候。透間もなく候と用事にて候。緞巴手をはつたと打候へバ、其まゝはしと音出申候。打手より音の出候間へハ、髪筋も入間ハなく候。手を打て後に音が思案して出るものにてハなく候。此のたとへにて候。人の打たる太刀に心が止り候へバ間が出来候。其の間に手前の働がぬけ申候。向の打太刀と我働との間へハ髪筋も入れざる程ならバ、人の太刀ハ我太刀たるべく候。禅の問答にも此心あり。佛法にてハとゞまりて物に心の残る事を嫌ひ申候。故にとゞまるを煩惱と申候。たてきつたる早川へ手玉を流すやうに、波にのつてぼつくと流れてちつともとゞまらぬ心を尊び候。

石火機

石火の機と申は、是も前の心持にて候。石をはたと打ツに、打といなや光り候。是も心のとゞまるべき間なき事を申候。かやうに申候とて、又早きとばかりこゝろえ候ハあしく候。心^(心得)を物にとゞめまじきと申ハ專一^(愚)に候。はやきと申心のとゞまらぬ所を申候。とかくとゞまる心ハ敵にうバはるゝ物にて候。又早くせんとてきつとおもへもふけ候へば、其思ひもふくる心に心をとられ候。^(設)

西行の歌集の内に^(家)

世をいとふひとゝしきけばかりの宿に^(人)
心とむなとおもふばかりぞ^(思)

と申歌ハ、江口の遊女のよみし歌なり。此の歌を剣術の極意となして、我と獨得心せられ候ハゞ然るべく候。心とむなとおもふばかりぞといふところへ落着あるべく候。禅宗にて、いかん是佛と問候。聲のいまだ終らざるに手をはたと打べし。又いかん是禅と問バ、拳をさしあぐべし。いかん是佛法の極意と問バ、其の聲のいまだ終らざる内に一枚の梅花となりとも、庭前の柏樹子となりとも言べし。云ふ事の吉凶をえらぶにてハなし。止まらぬ心は、色にも香にもうつらぬなり。此のうつらぬ心の躰と神とも佛とも云たつとむなり。禅心とも至極とも申候。くどく思案して後にいひ出し候へバ、金言妙句にても住地の煩惱と成申候。石火の光と申も電光の機と申も、ひつかりとするいなひかりの際に働くを申候。緞バ又右衛門とよびかくるに、おつと答ふる心を不動智と申候。又右衛門と呼ばかれて、何用にてかあるらんと思案して後に何用にて候などゝいふ心は、住地煩惱にて候。然バ、又右衛門と申者心得様にて、止りて物に動かされ、まよわされたる心を無明住地煩惱とて、凡夫にて候。又右衛門とよばれ、おつと答るを諸佛の智慧と申候。然バ、佛と衆生と二なく、神と人と二なく候。此の心の明かなるを神とも佛とも申候。神道、歌道、儒道とて道多く候へども、皆一心の明かなるを申候。しかれども、かやうに書付申候事も、只詞にて心を講釈したる分にて候。

此の心人と我身に有て昼夜よき事あしき事どもの業により、家にはなれ国をほろぼし、其の身の程々にしたがって善悪共に心のわざにて候へども、此の心いかなるものぞとさとり明らむる人なく候。世中にこゝろを講釈する人は有べく候へども、明らめ候人ハまれにも有べからず候と見及申候。たま／＼明らめ知り候ても、又行ひ候事成りがたく候。此の心を能く講釈しても、口ハぬれず候。火を能く説ても口あつからず、真の水真の火を觸ルでならでハ知申さず候。講釈したるまでにてハ知れ申さず候。此の一心の明らめやうハ深く工夫の上に出て可申候。

心置所

心の置所をいづくに置くぞ。敵の太刀に心を置けバそれ心をとられ、敵を切らんと思ふ所に心を置けバ我太刀に心をとられ、人の構我構いづれにも置所にとらるゝなり。とかく心の置所なしといへバ、或人の曰、我心をとかく餘所へやるといふにも、はやとゞまるによつて、こゝろを臍下におしこめて餘所へやらぬ様にして、敵の働きによつて転化せよといふ。尤きもあるべき事なれども、佛法の向上の段より見れば、臍の下に押込て餘所へやらぬといふハ一段低シ。向上にあらず。それハ修行稽古の時の位なり。敬の字の位なり。又、孟子が放心をもとめよといふたる位なり。立のぼつて向上の段にてハなし。敬の字の心持なり。放心の事ハ別に書進し候。御覧あるべく候。臍下に押込ておかふとすれば、押込む心にこゝろをとらるゝ。とにかくに、此の心の置所なきなり。ある人の言。扱ハ身の内にいづくに心を可置。答云。左手にこゝろを置けバ右の用がかけ、目に心を置バ、餘の所ハ皆用が虧るなり。然るときハ心は何所に置くべきといふに、どつこにも置かねば我身一ぱいに行渡りて全軀に有て大心ぞ。足、手、指、耳、目、口、鼻毛一筋の下まで行渡りて、心のいたらずといふ所なし。故に一身の内、どこなりとも入る所々に、りきみもなく働いて、即千手観音、不動明王の位にも我が身がなかつたぞ。一所に止るこゝろを偏といふて、劍術に

限らず嫌ひ申候。心をどこに置とおもふ心なれば、全軀に入りはまつてあるぞ。敵の働によつて、當位々々に心を用て総を捨て止むべからず、心を身の内に捨て置けバ餘所へハゆかぬものなり。一所にとゞめぬ工夫、これ修行なり。心をどこにもな置そと云ふが眼なり。肝要也。可秘々々。⁽¹⁵⁾

本心妄心

妄心とは悪心にて候。本心とは一所にとゞめぬを申なり。とゞめねバ身一ぱいにひろがりあるなり。妄心ハ、何ぞおもひつめて一所にかたまりくる心にて候。本心が一所へかたまり居申により、妄心となりて本心をと^(失)りうしなうなり。故に本心を取^(失)うしなへハ諸事の用が虧^(かけ)申候。是にて万端合点まいる事に候。本心は水のごとく、又止りかたまりたる妄心は氷の如くにて候。氷と水とハ一ツなれども、氷になりてハ手も足も洗はれ申さず候。其の氷解てからハ万事自由なり。さるほどに、妄心を能く解かして水になして、手も顔も洗うべし。

有心無心

有心の心無心の心と申事候。有心の心と申すハ、則右申す妄心と同時に候。有心とハあるこゝろと書申候。何事にても、一方へ思ひつめたところあれば、分別思案が生ずる程に、有心の心と申候。無心の心とハ、右の本心と同時にて候。止るところがなければ心に何もなし。何も無ければ無心の心にて候。此の無心の心になりて水の湛たるやうに一身に心を捨置バ、何にても用のむかふ時出て用を叶るなり。止心ハ働ぬぞ、何ぞに心をと^(止)むれば、見れども見へず聞けどもきこへず、喰へども其の味を知らず候。何ても其の思ふ事に心ハあるものにて候。本心に至るまでの橋にハその事々に働心をちやつくと跡へ捨、元の我になるハ修行稽古にて候。是も心をとゞめぬにて候。常々心にか

くれバ後にハ何となくひとり其の位へ至るなり。急に其の心にゆかんとすれば、もはやそれに心がとゞまりて一圓にいたらぬぞ。歌に

思ハじとおもふ物をおもふなり

おもはじとだにおもハじや君

水上打葫蘆子(ころし)

水上に葫蘆子を打ツ。捺着すれば則轉ず。葫蘆子を捺着とハ手を以て押す事なり。葫蘆子ハふくべの事なり。ふくべを水へ投て押せバひよつと脇へのき、又押せバひよつくと脇へのき、何としても一所にとゞまらぬものなり。本心に至りたるハ、此の水上にふくべの一所にとゞまらぬごとくなり。

應無所住而生其心(16)

此の文を訓に、読候へバまきに住する所なくしてしかも其の心を生ずと讀申候。よろづの業(万)をするに、しやうとおもふ心が生ぜねバ手も足も動かぬなり。又、心を生じてすれバ其のする事に心がとゞまるなり。然間、此の文ハ止る事なくして心を生ずべしとなり、其の事をしながら心のとゞまらぬ諸道の名人と申候。佛法とハ心の止るところから執着の心念起り、輪廻もこれよりおこり候。止る心を生死のきづ(絆)なと申候。花紅葉を見るも、花もみちと見る心が生じながら、そこにとゞまらぬ事肝要と仕候。慈圓の歌に

柴の戸に匂はん花はさもあれよ

詠めてけりなうらめしの身や(17)

花ハ無心^(句)にほひぬるを、我ハ心を花に止めて詠めけるよと、我身の色にそミ執着^(染)したる心をうらめしとなり。見るとも聞とも一所に心をとめぬを至極とするなり。敬の字を主一無適と註をいたして候。心を一所に取り定めて餘所へ^(散)ちらさぬやうにし、やらぬやうにして、後より抜いて切るとも切るかたへ心をやらぬを敬といふなり。尤肝要なり。殊に御主などの御意を承る事、敬の字の心眼たるべし。佛法にも敬の字の心あり。一心不乱と説玉^(しきたま)ふも、此の敬の字の心なり。敬白の鐘を鳴すとて鐘を三ツならして後を合せ敬テ白す。それと唱上候。此の敬白の心即主一無適、一心不乱と同儀にて候。然れども、佛法にてハ敬の字の心ハ至極所にてハなく候。我心をとらえみだれぬやうにするハ、いまだ修行稽古の位にて候。此の稽古、年月積りぬれば自由なる位へゆく事に候。右の應無所住而生其心の位ハ、向上至極の位にて候。敬の字の心ハ、心を餘所へやるまい、やれば乱るゝとおもひて卒度も油断なく引つめて置く位にて候。是ハ當座心をちらさぬ一段の事なり。常にかくのごとく有てハ不自由なる儀なり。綴ば雀子をとられじと猫の縄を常に引詰めてはなさぬ位にて候。我心を猫のつながれたるごとくにしてハ、用が心のまゝになるまじく候。只猫によくくしつけ^(懸)をしておいて、縄をおっぱなして、^(追放)ありきたい所へやり候て、雀子と一ツに居てもとらぬやうにするが應無所住而生其心の文の心に叶たるにて候。劔術の上にて申候ハゞ、太刀をハ打つ手よわするゝ、^(止)なとゞめそ、手をわすれて打て人を切れ、人に心を置な、人も空、心ハ止められまいぞ。

鎌倉の大覚禪師、大唐の乱に捕はれて切られんとする時に、禪師の頰に曰、珍重大元三尺劔電光影裏載春風と仰せられたれば、太刀を捨てはしりたるとなり。大覚の心は、太刀をひらりと振上たるハ電^{イナヒカリ}のごとく迄に電の光りとする間、何の心も何の念もないぞ、打太刀にも心ハないぞ。切る人も空、打太刀も空、うたるゝ我も空なれば、人も人にあらず、打太刀も太刀にあらず、うたるゝ我も我にあらず。只電の光のひっかりとする内に春の空吹く風を切たるごとく、一切止まらぬ心なり。風を切りたらば、手にも太刀にも覺あるまいぞ。かやうに心をわすれて万事をするが上

手の位にて候。舞をまふハ、手に扇を取、足を踏、其の手足を能せんと扇をよく舞んと思ひ候をわすれ去らねバ上手と申されず候。いまだ手足に心がとゞまらバ我面白かるまじきなり。何事も心を捨(切)きらずしてする所作ハ皆々あしく候。

寛放心心要放

寛(モトム)放心をと申事候。求放心とハ孟子が申たる事に候。離(はなれ)たる人を尋求て我身へかへせと中心にて候。緞バ犬猫鶏などを放して、餘所へゆけバ我家へかへすごとく、心は一身(あるじ)の主しなるに其の心あしき道へ行てとゞまるを何とて尋求てかへさぬぞといふ義なり。かやうにあるべき儀なり。又、邵康節ト申者ハ、心放つべしと申候。是又はらりと替たるやうに聞へ申候。右の心持ハ、心をとらえつめて置てハつながら猫になりて働かれぬぞ。物に心をとゞまらず、すなをうによくつかひなして、いづくへなりともおっぱなし捨置けといふ義なり。物に心が能くし(染)ミたがり、とゞまりたがりするによりて、しまするな、とゞまらずな、我身へ求めかへせと申事にて候。尤、求めかへせと申ハ、是いまだ初心の位にて候。蓮ハ泥にしまぬものにて候。去程に、泥の中右咲出で隠逸なるものにて候。よくみがきたる水晶の玉ハ、泥に入てもしまぬものにて候。かやうに心を自由にして、いづくに置てもしまぬ所までの修行肝要に候。稽古の時ハ孟子が敬の字の心、又いたりてハ邵康節が心ハ要放(はなつ)といふたる心なり。

前後際断

写真(8)

前後際断と申す事候。際ハあいだと讀申候。断ハ切ると讀申候。前後のあいだをきつてはなせと申儀なり。こゝろをとゞめぬ事にて候なり。

文化 六己巳年 三月吉

戸田茂太夫 授之而

書写ス

注(1)

五十二位。求道者(菩薩)の修行の段階を五十二に分けたもの。順次に十信・十住・十行・十回向・十地・等覺(正しいさとりに等しいさとりに得た位)・妙覺(迷いを滅し尽くし、智慧がまどかに具わった位)をいう。十信から十回向までは凡夫で、初地以上から聖者の位に入る。十信を外風と名づけ、十住・十行・十回向の三十位を内風(または三賢)と称する。大乘の、仏たるに至る五十二の位。

(中村元『佛教語大辞典』
東京書籍・一九八七)

(2) おottoつて。原典には「もぎとりて」とある。

(3) 智慧。原典では「智慧」。惑いを断つて、さとりを完成するはたらき。

(中村元『佛教語大辞典』)

(4) 讎をなさんとおもひ。原典では「仇をなさじと思ひ」となっている。「讎をなさんとおもひ」では意味が通らない。

(5) 跡を捨て跡を捨て候ハバ。原典は「跡を捨て跡を捨ひ候はば」となっている。

(6) 二人しての時ハ。原典は「二人めの時は」とある。

(7) 千ノ眼が何しにあらんと破るなり。原典は「千の眼が何しにあるらん、虚言よと破り譏る也」と表現が丁寧である。

(8) 剣術に申べく候。原典は「貴殿の兵法にて申すべく候」とある。「貴殿」とは柳生宗矩のことである。また原典では「剣術」の読は一度も使わずすべて「兵法」としている。

(9) 太刀の取様も皆しんあいに成て。原典では「太刀の取様も、皆心のなくなりて」としている。

(10) 十二調子。原典には本資料にあるような「田図」はない。図で示した法がわかり易い。

(11) 何もとりあへず。原典では「何も取あはず」としている。「取あはず」の法が表現が正しい。



写真(8) 『剣術心法神妙録』の最後の頁。

- (12) 剣術の上にて申候。原典では「貴殿の兵法にてなれば」となっている。
- (13) 三箇九箇。原典では「五箇に一字の」となっている。『柳生新陰流兵法之書』(今村嘉雄編「日本武道全集・第一巻」(七五―七六頁、人物往来社、一九六六))によれば、「三字」として「一、身構。二、手足。三、太刀」を挙げ「右之三ケを以初学の門として是より学び入べし」としている。

また、「就三字又五ヶ之習」として「一、身を一重になすべき事。一、敵の拳を我肩にくらふべき事。一、我拳を楯につくべき事。一、左の脇を延すべき事。一、さきの膝をもたせ、あとの膝をのぼすべき事。」を挙げ「三字之初年、是はかまへ也」としている。

- 「九箇」については「一、必勝。一、逆風。一、十太刀。一、和(かばく)。一、捷徑。一、小詰。一、大詰。一、八重垣。一、村雲」挙げ「右師弟立相以願之、書面ニ難シ題レ之」としている。
- (14) 剣術にたとへて申セバ。原典では「貴殿の兵法にたとへて申せば」となっている。
- (15) 可秘々々。原典には「可秘」の語はない。
- (16) 應無所住而生其心。應に住する所無くして其の心を生ず。「金剛經」からの引用である。
- (17) 柴の戸に匂はん花はさもあれよ、詠めてけりなうらめしの身や。原典では「柴の戸に匂はん花もさもあらばあれ、ながめにけりな恨めしの世や」とある。
- (18) 大覚禪師。原典では「無学禪師」。無学は号。もと中国宗代の人で祖元という。北条時宗の招きで弘安二年(一二七九)来朝、鎌倉円覚寺の開祖となる。同九年入寂。諡は弘光禪師。(今村嘉雄編「日本武道大系・第九巻」(七一―七二頁、既出。))
- (19) すなをうに。原典では「染ぬやうに」となっている。「すなをうに」では意味が通らない。

解説

- 1、原典では「剣術」の語は一度も使わず、すべて「兵法」と称している。これは例えば柳生新陰流の伝書『兵法家伝書』(柳生宗範著、正保三年(一六四六))『新陰流兵法之書』(柳生宗範著、慶長元年(一五九六)、元和四年(一六二八))や『兵法三十五箇条』(宮本武蔵著、寛永八年(一六四一))『五輪書』(宮本武蔵著、正保二年(一六四五))で「剣術」を用いず「兵法」の語を用いたのと同様である。「兵法」は「剣術」と同義語というより、もっと広い意味を表わしていたと思われる。

- 2、本資料では「箇条目録」として項目を挙げているが、原典には「無明住地煩惱、諸仏不動智」の他は特にない。しかし

項目を挙げた方がわかり易く、その故か現代の刊本では、みな項目を挙げている。しかし、ただの説明書に墮すおそれがある。

3、原典に比べて、本資料では言葉の使い方にかんがりの簡略化がみられる。その幾つかを「注」に示したが、実際にはこのような例がもつと多い。しかし、全体的には原典の云わんとする所を、いかに理解してもらうかという思いやりからの簡略化と思われる。

4、ただし、原典にある「急水上打毬子、念々不停留」と「水焦上、火洒雲」を全く抜いている。

5、この原典は、本資料を含めて様々の書名をもつて武芸者に親しみ読まれてきた。内容は「剣の至妙の境地は禅のそれと一致するという、いわゆる剣禅一如の思想を多くの事例を挙げて説いた心法論であり、剣禅一如、弓禅一如など、あらゆる武芸や芸能の一つの思想的ルーツ」(今村嘉雄編『日本武道大系』第九巻、六頁・既出、参照)となった書である。この書が寺山家に所蔵されていたということは弘前藩の武芸者に読まれていたことの証拠となるわけである。

13、『武 律』

写真本(1)

冊子本

本多忠勝授
息男及家臣

浅利文庫

注 表紙及び目次なく、また後半の部分は破損大きく判読できない。

一、天下ノ武功吟味ハ、元弘年中ニ楠河内守橘正成、勅ヲ奉ジテ窄鑿シ、一卷の書ヲ書立テ置キシヲ、文明ノ頃、公方常
(足利)
徳院源義直公是ヲ秘蔵シ給ヒ、細川左京太夫源政之エ被仰付、文武ノ才アル輩ヲ集メ、異国本朝ノ正シキ理ヲ書添
エ、末代マデ其ノ法ヲ専ラ道ニ障リナキヤウニト思召書置カセ玉フヲ、年経而後如何ニシテ落散シケン、三河ノ国

ノ住人、夏目五郎兵衛菅原忠氏ト云フ人は是ヲ所持ス。

其ノ頃御祖父清康公^(松平)、武道ノ吟味ヲ專ラトシ給フ故、是ヲ被召上、御秘藏アリテ大御所様マデ御傳ヘ遊サレシヲ、大須賀五郎左衛門平康高、酒井左エ門尉源忠次ニ被仰誂、御軍法ノ内ヘ入レラレシ也。

秀忠公未ダ^(徳川)黄門^(中納言)ニテ御坐ノ時遣サレシヲ、忠勝ノ亡キ御前に罷有テ拜見仕リ、端々覺エ候故、彼ノ法ヲ本ニ立テ私ノ所存ヲ書加之。

一、凡ソ軍^(いくさ)ノ習ハ、敵味方ノ軍兵ヲ催シ、天下分目ノ合戦ヲ成スト云ヘドモ、虎口⁽¹⁾ノ鎗場ニゾム兵ハ、敵味方トモ二百人ニ不過モノ也。況ンヤ真先^(まっさき)カケ鎗ヲ合セ勝負ヲ決スル兵、多クシテ七八人ニ不過、是皆古ヨリ證拠度々有ル事也。故ニ云、敵味方何萬人モアレ、備表^(そなえ)ヘ出ル兵ハ百人、敵ト鎗ヲ合スル兵五人、敵ヲ突崩ス鎗ハ一人ニ極ルト云ヒ傳ハル也。其ノ外ハ何人モアレ後陣ニツカヘ居テ、虎口ノ勝負ヲ守ルモノ也。去ル程ニ、数万ノ大軍モ二人三人ノ鎗先ニ突崩サレ、或ハ先鋒ノ四人五人ノ勝負ヲ以テ敵味方ノ数万人ノ勝負トナル事ハ、軍有ル度毎ニ有ル事也。如此ノ道理ハ、数度ノ合戦ニ不逢バ其ノ習ハ不可知。去レバ、数万人ノ中ヨリ抽^(ぬ)キ、鎗ヲ合セ勝負ヲ始ムル志ノ至而剛ヲ称美シテ、一身ノカセギニハ、鎗ヲ合スルヲ第一トスル也。惣ジテ働ノ強キヲ譽テ鎗ト呼ブ亥ハ、古ヨリ鎗ホド強キカセギ⁽²⁾無之故ニ、末代ノ諺ニモ如此云也。

凡ソ鎗ト云ニ、其ノ品ハケ条アリ。一番鎗、二番鎗、小返鎗、大返鎗、付ケ入鎗、城攻鎗、籠城鎗、請止鎗是也。是ニ差續^(さし)キタル働キ、又四ケ条アリ。一番乗、乗込鎗、脇太刀鎗、脇弓是也。其ノ外高名ニ七ケ条アリ。鎗下高名、鎗脇高名、鎗場高名、退口高名、捉討高名、崩涯高名、場中高名是也。右十九カ条ノ場数ハ、義尚公ヨリ定如此。^(足利)
乍去、此ノ内ニモ志ヲ吟味スル事也。第一也。譬バ、敵味方互ヒニ数万ノ大軍ヲ催ス候処ヘ推出^(押)シ、備ヲ立テ、合戦勝負ノ始ル前方二町三町ニ攻メ寄リ、弓鉄砲ノ迫合^(せりあい)始リツ、次第々々ニ近付キ、敵味方互ヒニ楔形ニナリ、己

ニ早ヤ三十間、四十間ノ内外ニ引受ケ、矢軍盛シニナリテハ敵味方共ニ手負ヒ、死人將墓倒シノ如クニ重而、見ル内ニ残リ少ナニ討ル、故ニ、両方トモニ弱キ者ハ二ノ足ヲ踏ミ、強キ者ハ鏖ヲ傾ケ漸クフミ忭ルモノ也。其ノ時、一備二三十ノ内ヨリ三人四人ノ兵抽キツ、備面ヘ進ミ出振リ、見亘ニ踏ミ忭ヘ、後ル者ヲ勇メ、⁽⁴⁾前後左右ヲ下知シテ始終堅固ニ忭ヘルハ、其ノ功一度ニテモ数ニ向フル処ナレバ、是ヲ嘗テ武辺ト申ス也。

如此ニ働ク兵ハ後迄忭ヘルモノナリ。故ニ必ズ鎗ヲスル者也。

乍去、其ノ品ニヨリ、敵ツカヘズシテ崩ル、カ、又ハ其ノ兵、矢鉄砲ノ手ヲ負フカシテ後陣ヘ引退テ鎗不仕共、其ノ者ハ鎗ヲ合スル同前也。其ノ子細ハ、人ノ進ミガタキ忭ヘガタキ場ヲ人先ヘ出、抽テカセグハ敵味方進ミ打合ハハ鎗合セベキ亘ハ必定ナル故也。去ルホドニ、城ヘ取寄セルニモ野合ニモ、カ、ル時ニモ五百人千人ニ勝ルヲバ、和漢共ニ古ヨリ英雄ト号シテ武士ノ棟梁ト云フ也。一度ノ鎗ヲ嘗ルモ千万人不得進所ヲ抽テ進ム者ヲコソ嘗トハ云フ也。

惣ジテ鎗ト云フハ、懸口、退口ニ不限、敵味方ノ明キ未ダ十五間モ甘間モアル時、味方ノ諸軍ヲ五間モ七間モ離レ出、両軍見物ノ前ニ而粉レモナク合スルヲ鎗トハ云フ也。タトヘ鎗合セタリト云ヘ共、敵味方ノ先勢已ニ鉾交ル時ニ及ビ、一足ニ足踏出シ、敵合スカ又ハ退口ノ鎗モ己ハ敵ニ鎗長ニ進ミ著シ、一足ニ足戻テ合スルハ鎗トハ不云、敵ノ未ダ追付キ其ノ間阻リタル時、味方ノ同勢ノ中ヨリ抽テ六間モ七間モアトヘ取テ戻シ、踏ミコタヘ敵ノ追ヒ来ルヲ待受ケテ紛レモナク合スルヲ鎗トハ云フナリ。惣ジテ、敵味方推合フ時ニ及テワケモ不見ハ鎗トハ不云モノ也。

一番鎗之事

一、弓鉄砲ノ追合ヒ終リ、敵味方已ニ二十七八間ホドニ近付キ鉄砲モ打ツ事不成ホドニ引受ケテハ、人ミナ震ヒ恐レテ、

眼モ直視無相ニナリ、他更ヲ忘レ互ヒニ念佛ヲ唱ヒテ足ヲ踏ミ睨ミ合ヒテカヽリ兼ルモノナリ。其ノ時、敵味方ノ向ヒ居ル虎口前ノ鉾ニ於テ、剛ノ兵唯一人、味方千二千ノ中ヨリ抽ツ、真先ニ走出、大敵ノ待チ受ケタル鎗前へ、面モ不震懸リツ、鎗ヲ打込ミ合戦ヲ始ムルヲ、一本ノ鎗ト称美シテ一番鎗ト云フ。敵ヨリモ合ス一人出向テ、両方ノ真先中ニテ曠成鎗合ハ、猶以テ潔キ鎗也。又、敵ツカヘズシテ鎗不合モ、是ヲ一番鎗ト云フ。但シケ様ノ場ニテハ、一人ニ不限、七八人ニテモ其ノ備ヲ出離レ真先ニ進ミ出、鎗ヲ合ハスハ少シノ遅速、少シノ一二ヲ不論、五人ナラバ五人、七人ナラバ七人トモニ鎗ヲ合スト云フ。

惣シテ一番鎗ト云フハ、敵味方ノ推合フ鉾ニテ、只一人真先ニ進而鎗ヲ打込ミ合戦ヲ始ムルヲ云フ。故ニ一番ニカヽルト云ヘ共、二人トモニ進ミ鎗ヲ合ハスヲバ一番鎗トハ不云、只鎗トばかり云フモノナリ。如此、敵味方ノ推合フ鉾ニテ合ハス鎗ノ一人ハ不及云、五人六人ニテモ七八人ニテモ是ヲ鎗ト号シ本ノ鎗ト云フ也。五六人七八人ドモノ鎗ハ、少シノ遅速ヲ分ケガタキ故ニ、一番ニ番ト不云。乍去、一間二間モ遅速アラバ一番ニ番ト分ル也。是ハ鎗合ハス遅速ヲバ不論、只備ヲ走出ル所ノ遅速ヲ以テ一番ニ番ヲ分ル也。勿論一番ニ進ムガ一人ナラバ其ノ一人ヲ一番鎗トシテ、續ク兵五六人アリ共、押合セテニ番トス。若シ一番ニ進ムガ二人トモアラバ、其ノ輩ヲ鎗ト云ヒ、ツヅク兵ハ鎗トハ不云。乍去、一番ニ進ム兵ガ敵ニ突返サレテ敗軍スルニ、續ク兵ガ入代リテ、シカモ二人三人ニ而敵ヲ支ヘ止メ、始終踏ミコタエ、鎗ヲ仕リ、惣軍ヲ引付ケ勝負ヲ決スルハ、是ヲ鎗ト号シツ、一番ニ進テ突返サレテ引退キタル兵ハ、一人ニテモアレ又ハ鎗モ合ハスカシ鎗トハ不云。乍去、一番ニカヽル兵共大敵故突立テラレツ、一旦不堪敗軍スルトイヘドモ、足行ニテ遠北セズ返合々々振り能ク拂退キニシテ二番ニツヅク兵トシ、ヤラジ合取テ戻シ、又鎗合スハ鎗ト云フ。但シ一番ニ番推合テ唯鎗ヲ合スト其ノ功押込テ同前也。子細ハ、二番ニツヅク兵、一番ニ進ム兵ヲ目ニ付ケ、夫レヲ便リトスル志次ナレバ、一番ノ兵ト入代リ鎗ヲスルトモ、其ノ意地ハ劣レ

リ。又、一番ニ進ム兵ハ諸人ニ勝レテ雖抽、突返サレテ二番ノ兵ノ力ヲ得テ返合スレバ、一番ニ進ム志ハ尤ナレドモ、其ノ功少シ故ニ一番ニ番押込テ其ノ功同前ナリ。但シ其ノ場ノ品ニヨリ、一番ハ一番、二番ハ二番ト分ル莫モアルベシ。

惣ジテ両軍ノ鋒本ノ鎗場ニテ合ハストモ、七八人ヨリ多クハ鎗トハ不云、惣カ^(懸)リと云フ。子細ハ、互ヒニ懸リカネテタメラウ所ヲ抽テ諸人ニ勝レテ進出ル者コソ鎗ナレ。大勢進ムハ何ヲ嘗トセン。故ニ、二人三人ニテモ其ノ掛口^(かみぐち)混乱シテ見分ケガタクバ鎗トハ不云、五六人七八人ニテモ、両方ノ鋒ニテ己カ備ヲ離レテ進ミ、五間モ六間モ抽テ紛レモナク鎗ヲ打込ムヲ本鎗ト云フ也。

二番鎗之事

一、已ニ一番鎗ノ一人進ミ、推續キ又一人ノ兵掛ケツ、一番鎗合ハス所へ續キ續キテ鎗ヲ打込ムヲ二番鎗ト云。又、五六人七八人ニテモ一番ニ續テ備ヲ走り出、同勢ヲ離レテ走り掛ケ鎗ヲ打込ムハ二番鎗ト云。少シノ不同ヲ不論、五六人ニテモ推合テ二番ト云。七八人ヨリ多キハ鎗ト不云懸ト云フ。其ノ理一番鎗ノ中ニアリ。

(おおがえし) 大返之鎗之支

一、味方敗軍ニ及ビテ敵ニ手火疾ク附ラル、時、味方ノ兵唯一人取テ返シ、面モ不振踏ミコタヘ、追ヒ来ル大敵ヲ支ヘ止メ、惣軍ヲモリ返シテ合戦ヲ始メ、勢ヒ掛ル敵ヲ突キ返シ、大イニ勝ヲ得サスルヲ大返ノ鎗トモ守返^(盛)シノ鎗トモ云也。是ヲ又一本ノ鎗ト嘗^(たたく)テ其ノ功一番鎗ニ勝ル也。如斯ノ場ニテハ一人ニ不限、五人六人、七八人マデヲミナ押合セテ鎗ト云。五六人、七八人有リ共其ノ一番ニ返合スル兵第一ニ嘗也。

乍去、退口ハ掛口ト違ヒ、味方ハ我先ヘト引退ヒテ、敵ハ氣ニ乗^ルて追重ル故ニ、一旦追返シテモ又モリ返シテ掛リツ、シタルク勢⁽⁷⁾ヒ掛ルハ、骨ヲ折ル支掛ケ軍二十倍セリ。故ニ一番ニ返合スヲモ後ニ返合スヲモ押合セテ五人ナラバ五人トモニ鎗ト云。乍去、一番ニ返スヲ先ズ替ル也。

(こがえし)
小返之鎗之事

一、味方敗軍シテ敵ニ付ケラレ、已ニ間近カニ追ヒ詰メ来ル時、唯一人味方安ク引取ラスルヲ小返ノ鎗ト云フ。但シケヤウノ場ニテハ一人ニ不限、五人六人七八人ニテモ返合セテ鎗ヲ合スハ、五人ナラバ五人トモニ鎗ト云フ。況ンヤ後口ニ引下リテ節々返合セテ敵ヲ突返シテハ退ケ、又敵追ヒ来レバ取テ返シ、数度ノ鎗ヲ合スルハ猶以テ古今稀成ル強キ鎗也。其ノ度数ヲ算ヘテ何度ノ鎗ト云。タトエ幾人返合セ共其ノ一番ニ返ス兵ノ幾度鎗合ハストモ、一度モ不洩ヨリシテ大功後々迄勤ムルヲ第二トスル也。一番ニ返ストイエドモ、續ク兵ニ渡シテ引クカ、又ハ漸ク一度手ニ合ヒ逢ヒ、脇モ不合引キ退クヲバ、鎗ハ合セドモ一番ニ返シタリトモ少シノミ不替。

小返ト云フハ、味方ノ惣人数ハ不返、只五六人七八人ノ兵計返シテ鎗ヲ合ス也。其ノ隙ニ味方ヲ引取ラスルヲ云フ。大返ト云フハ、右ニ云フ通りニ、殿リノ五六人ノ兵返シ合セテ踏ミコタヘ、惣軍ヲ守リ返シ、鎗ヲ合ハセ、合戦ヲ始メ、大敵ヲ迫メカヘスヲ云フ也。大返小返ニ不限、人少シニテ返スホド手柄トス。況ンヤ一人ニ而返合セテ味方ノ危キヲ助ケ、剩ヘ数度ノ鎗ヲ合セ、或ハ能キ師場ニテ踏ミコタヘ、大返ノ鎗ヲ合セ大敵ヲ靡^(なび)ハ鎗ノ根本ト云フ也。

請止之鎗之支

一、味方ハ待チ軍ニテ扣ルニ、敵軍備ヲ崩シ真黒ニ突テ掛ル時、何ト剛ノ者ニ而モ白ミテ張出ス者ハナキモノ也。其ノ時、味方ノ備ヨリ二三人ニ而モ七八人ニテモ進ミツ、己カ備ヨリモ二間三間モ張出シ、敵ノ掛ルヲ待受ケ而鎗ヲ合スヲ請止メノ鎗ト云フ。七八人迄ヲ鎗ト免ス。^(ゆる)夫ヨリ多キハ鎗ト不云。其ノ理前ニアリ。又、先手追立ラレ敗軍スルニ、二ノ備ノ兵トモ五六人ニテ己カ備ヲ二間モ三間モ張出テ、敵ノ勢ニ掛テ我ガ先備ヲ追立テ備掛ルヲ待受ケ、鎗ヲ合セ合戦ヲ始ルヲ、又呼テ受止メ鎗ト云。七八人ニテモ己カ備ヨリ二間モ三間モ張出シ一面ニ立双、^(ならび)天晴ナル鎗合ハ鎗ト免ス。乍去、待受ケズシテ我ガ先備ヲ追立テ来ル敵中へ、二ノ備ヨリ鎗ヲ入ルハ横合ト是ヲ名付ケ、鎗ヲ合スルトハ不云。

又、敵ノ大勢引取ルヲ味方ノ強者二人三人ニテ惣軍ヨリ先立チテ追行キ深入リシテ敵ニ大返ニ返サル、時、カノ兵共二三人ニ而追行キタル場ヲ少シモ不去踏ミコタヘテ鎗ヲ合ルヲ、又名付ケテ大返シ請止メノ鎗ト云フ。若シ敵ニ返サレテ不怵得、味方ヘ北ケ歸ルトテ北ケナガラタ、キ合ヒタルハ鎗トハ不云。乍去、踏ミコタヘテ鎗合ハストモ四五人ヨリ多キハ鎗トハ不云。是ノ敵ハ退口ニテ味方ハ勝テ勢ツ、追行ク場ナル故、四五人多キハ其ノ志無詮。以上三段ノ鎗ハミナ請止之鎗也。

城攻之鎗之要

一、味方大軍ニテ敵城ヲ取巻クニ、敵門ヲ開テ突テ出ル時、門前ヘ取詰メタル味方千二千ノ備ノ内ヨリ二三人ノ兵ドモ真先ニ張出シ、敵ノ出ルヲ待受ケ鎗ヲ合スヲ又鎗ト云フ。其ノ吟味、野合ノ僉議ニ同シ。

又、味方ノ勢、敵ノ出ルニ白ミテ見崩レニ退キ去ルニ、其ノ中ヨリ二三人少シモ不退、師場ヲ堅メ、踏ミコタヘテ、出ル敵ヲ待受ケテ鎗合ハスハ、一入強キ也。^(ひとしお)又、敵ノ出ルヲ見テ、寄手ノ兵三四人抽キ相掛ケニ掛ケテ鎗合ハ

スハ、其ノ遅速ヲ分ケ一番二番ヲ定ルニ、味方ノ兵二人三人ニテ諸人ヲ抽キ門内エ掛入リ鎗合ハスモ同前ニ、一二ノ分ケ鎗ト云フ支、野合同前也。

籠城之鎗之支

一、味方籠城ノ時、城中ヨリ突テ出ルニモ一人抽テ真先ニ出ヲ一番鎗トシ、ツダイテ抽テ進ムヲ二番鎗ト云フ。其ノ次第野合ニ同然也。節々突テ出ル度毎ニ、其ノ兵真先ニ出ル其ノ度数ヲ以テ幾度ノ一番鎗ト云。大手、搦手トモニ突テ出ルニ、両口ニテ鎗有レバ、大手ニテハ誰一番鎗、誰二番鎗、搦手ニテハ誰一番鎗、誰二番鎗ト云フ。寄手ニテモ分ル支是ニ同ジ。大手ニテ何レカシ搦手ニテ誰鎗ヲ仕ト云フ。

付入鎗之支

一、味方ノ軍勢敵ノ城ヲ取巻ク時ニ、敵備ヲ出シ或ハセリ合或ハ夜討朝掛ニ出ツ、城中ヘ引取ル所ヲ、味方ノ剛ノ者二人三人ニテ諸人ニ先立テ付入レニ追込ムニ、敵ノ内ヨリ四五人ニテモ七八人ニテモ取テ返シコレヲ追出サント掛カル時、味方二三人ノ兵ノ追込ミタル場ヲ不去踏ミコタヘ合ハスルヲ、付入鎗ト云フ也。敵味方トモニ強キ鎗也。野合ニテ大返シノ受止メ鎗ト同前ノ鎗也。五六人ヨリ多ク付入ニ追込ミテ、タトヘ鎗合ハス共鎗トハ不云。是ハ追行ク場ナル故ニ如斯。城方ハ退口ナレバ五六人トイヘドモ、返合フ大敵ノ付入ルヲ突出シタラバ強キ鎗也。

鎗心持之支

一、或ハ高クシ早クシ、又ハ溝、堀ヲ隔テ推合ハセツ、互ヒニ挟ミ不働ニゾセイテ抛突クニ、シタリトモ、其ノ後

(急) (なげうち)

(9)

鎗場ナラバ鎗ト云フ。

惣ジテ右ニ註スル所ノハカ条ノ鎗場ナラバ、鎗ノ先ハ不合トモ、又ハ其ノ間五間七間隔テタリトモ、走出テ鎗ヲ振廻スヲ鎗ト云フ也。其ノ外ハ、タトエ血ヲ流スホド突合フタリトモ鎗トハ不云、只迫合ト云フ。タトヘ持ツ所ノ道具ハ長刀ニテモ、其ノ働キノ場、鎗場ナラバ鎗ヲシタリト云フ。⁽¹⁰⁾

偕又、武功の吟味モ、志ヲ賞美スルヲ第一トシ、第二ニハ又功ヲ為ス所ヲ專ニ心得ベシ。タトエ一番ニ刀ヲ持テ進ムハ、其ノ志長道具ヲ持テ掛ルヨリ遙ニ強ミナレドモ、刀ハ大敵ヲ拉ク^(く)長刀ノ業ニハ申スニ及ハズ、故ニ古ヨリ一番太刀ト云フ事ナシ。又、鎗長刀ハ三人四人ヲ合手トシ、タ、キ立テ、追フ時ハ大敵ヲ突崩シ、^(理)莫ノ利ニテ功ヲナシ、所速キ成ヲ以テ鎗ヲシタルト。是ヲ勿論刀ニテ一番ニ掛リ、又ハ取テ返スヲ誓ト不云ニハアラズ。只其ノ志ヲ感ジテ先掛ケ、又ハ退口ノ太刀討ト云フ。品ニヨリ鎗モ可成、又弓鉄砲モ十人二十人射殺シ打殺セドモ、是ヲハ不譽。只肝要ノ所ヲ一筋ノ矢、一挺ノ鉄砲ニテ支ヘツ、五万三万ノ大敵ニモ不屈ル所ヲ以テ誓トハ云フ也。万莫如斯ノ所ヲ能ク吟味スル事肝要也。

鎗場度数之衷

一、惣テ軍ノ法ニテ敵味方推合ヒ追ヒツ返シツ戦テ勝負ヲワケ、^(どつ)踵ト追崩スヲ一師場居ト云フ也。又城攻ノ時モ突出、推合ヒツ込出シ追込ミシテ互ヒニ颯ト引別レ、寄手ハ陣ハ城兵ハ城エ互ヒニ引取タルヲ一師場居ト云フ。

一師場居ノ中ニテ、五間六間進ミ退キ、追ヒツ返シツ戦フヲバセリ合ヒト云ヒ、鎗ト云フハ其ノ推合ヒテ掛ル時ノ鎗始メヲ云フ也。

推合テ後ノ爰彼^(こかしこ)ニテ込メツ返シツ鎗ニテタ、キ合フハ、鎗迫合トテ鎗ノ度数ニセズ、数度ノ鎗仕リタルト云フハ

其ノ推合ヒ掛ル時ノ鎗ヲ、一人ニテ毎度スルヲ云フ。小返シノ鎗幾度迄合ハセタリト云ヘドモ、一辺ノ内ニテ相戦ヒ、五間六間追ヒツ返シスルハ度数ニハセズ、一返ニテ相戦ヒ終テ敵ヲ追返シ、其ノ身モ十間モ廿間モ引退キツ、又、敵ノ慕ヒ来ル時取テ返シ踏ミコタエ、鎗ヲ合ハスヲ一度ノ数トシテ其ノ数ヲ都合シテ幾度ノ鎗ト云フ。

野合、城攻鎗心得之要

一、敵味方互ヒニ野ニテ備ヲ立テ推合テノ大合戦ハ、其ノ備々ニテ一二ノ鎗有ル也。誰ガ手ニテハ誰ガ一番鎗、誰ニ番鎗ト云フ。城攻メノ鎗モ、大手ハ大手、搦手ハ搦手ト一二ノ鎗ヲ分ケル也。大手ニテハ誰何番鎗、搦手ニテハ誰何番鎗ト云フ。城中ニ鎗有レバ、二度目ノ掛合ニハ誰何番鎗ト云フ。一人ニテ毎度ノ鎗ヲセバ、何ガシハ幾度ノ一番鎗、幾度ノ二番鎗ト云フ。初度ニハ一番鎗デ後ノ度ニ番鎗ナラバ、誰ハ初ノ度合戦ニハ何番鎗、後ノ度ニハ何鎗ヲ仕リタルト云フ。

偕又、一番鎗ハ手前ニ而合ハスニ二番鎗ハ深入リシテ敵ノ備ノ胸筋ヘ入レテ一番鎗ト功ヲ爭フトモ、一番ハ一番、二番ハ二番ト定メノ如クニ可分。子細ハ一番鎗ノ進ムヲ見テこそ二番鎗ハ進ミタレ。タトエ敵ノ真中ヘ入り鎗ヲ仕ルトモ、其ノ志ハ一番鎗ニ劣レリ。

又一番鎗ハ、手前ニテ鎗合ハ鈍クトモ強キ鎗也。其ノ故ハ、諸人ノ進ム人前ヲ抽テ手始メラ仕ルハ、志ハ中々無比類成ル故也。

又、一番鎗ヲ合ハス兵ガ其ノ場節所ニテ抛突ニスルカ、又ハ、鎗ヲ切折レナドシテ刀ヲ拔テ二番鎗ノ合ハス時ニ鎗脇ヲ詰メタラバ一番ヲ合ハセ、其ノ上ニ番鎗ノ脇ツメノ太刀一場ニテ両度ノカセギト云フ也。

鎗下ノ高名セバ一番ヲ合ハセ、剩エ引取テ落シテ高名一陣ナラバ一陣、先陣ナラバ先陣ニ乗込ミ捉討ヲ仕ルト云

フ。其ノ外ハ乗込テ組討ヲ仕リタルト云フ。

第三ニ太刀討シテ互ヒニ飛込テ引捉フルノ高名。

第四、鎗脇ノ太刀、葉武者⁽¹²⁾ニテモ後ヨリ續キタル兵ニテモ鎗合フ最中ニ鎗下ヘ飛込ミ捉討ノ高名。

是ヲ名付テ鎗下ノ捉討ト云フ。

第五、互ヒニ物見ニ出ツ、^(よりあい)寄合頭ニ出逢テ組討。

第六、我レ退口ニ及テ取テ返シ踏止リ、追ヒ来タル敵ト引捉ヒ首ヲ取ルヌヲ退口ノ捉討ト云フ。

右ノ六カ条ノ内、物見ノ捉討ヲバ禁ズル也。

場中之勝負並ビニ高名之支

一、敵味方相對シテ合戦已ニ可始、前方其ノ間二町三町隔タル時、^(味)方ヨリ心掛ノ兵五人六人真中ヘ出張リ、弓鉄砲

長刀等ノ得道^(具)ヲ持ツ迫合^(せりあい)ラ場中ノ勝負ト云フ。ソコニテ弓鉄砲ニテ打倒シ突伏セ首ヲ取ルラ場中ノ高名ト云フ。

倅、其ノ者トモ踏ミコタエ睨合フ内ニ、敵味方備ヲ立寄せ、次第々々ニ近付キ、互ヒニジリノト推付ケ、ソコニテ鉄砲モ静リツ、鎗始ルモノ也。乍去、軍ハ勝負ナクシテ鎗ノ有ル事モ可有。場中ノ勝負有テ鎗ナキ事モ有ルナリ。如斯ノ品ヲ勘ヘ、其ノ心得有ベシ。

崩涯之高名之支

一、敵味方已ニ鎗場ニ臨ミ、味方ノ兵真先ニ進テ鎗ヲ合セント掛ルトイヘドモ、敵コタヘズ^(とつ)墮ト崩ル、時、其ノ兵直ニ走付ケ突伏セ首ヲ取ルヲ崩涯ノ高名ト云フ。敵コタヘバ何ホドモ強キ鎗有ルベシトイヘドモ、敵コタヘズ故、鎗

不合トモ其ノ志ハ同前也。故ニ此ノ高名ハ追討同前タリト雖モ、真先ニ進出ル意地ヲ称美シ、其ノ者ノ規模ヲアゲテ崩涯ノ高名ト云フ。

鎗場高名之支

一、或ハ懸口、或ハ請止メ、又ハ付入り、大返シ、小返シノ場ニ不限、八カ条ノ鎗場ニ於テ鎗ヲ合ハセ、兵其ノ鎗ノ合ハス手ヲ突伏セ、鎗合ハス最中ニ其ノ首ヲ取りタルヲ鎗場ノ高名ト云フ。

其ノカセギノ手強キ事、是ニ比スベキ高名ナシト雖モ、千度ニ一度モナキ事也。掛ル時ノ鎗場ナラバ、掛口ノ鎗場ノ高名、請止メナラバ請止メノ鎗場、小返シ大返シナラバ其ノ品ノ鎗場、一番鎗場ナラバ一番鎗場ト云フ。證文ニハ、タトヘバソコニテ鎗ヲ合ハセ鎗場ノ高名ヲトルト書ク也。凡ソ品々アル第一ヲバ一番鎗下ノ高名ヲトグルト云フ也。如斯ノ品^(タ)□□吟味有テ功ヲ分ツニ誤リナク諸卒ノ恨ヲ不受ヤウニ可心^(得)□也。

一番鎗論之支

一、虎口場ニ臨ンデ味方ノ兵二人一番鎗ヲ合ハセ、兩人ナガラ一番鎗ト争フニ、其ノ場一所ニテ立並テ鎗ヲ合セタラバ、其ノ内ニ備ヲ走り出タ所ノ早キヲ一番鎗ト云フ。

若シ備ヲ出ル所モ鎗合セモ同時ニテ、しかも同場ナラバ、又前ニ立ツヲ一番鎗ト云フ。
場所違ヒタラバ、敵ノ備^(ほこ)ノ銚^(し)へ掛ルヲ一番鎗トシ、備ノ端へ掛ルヲ二番鎗トス。

又、道筋ヲ一番鎗トシ、道脇カ又ハ端ヲ行テ合ラルヲ二番ト云フ。

或ハ又、左右ヲ分テ左手先ニテハ誰ガ一番鎗ト云ヒ、右手先ニテハ誰ガ一番鎗ト云フ。

一備ニテモ、二人ノ兵別々ノ組下ナラバ、何ガシハ誰組ノ一番、何^{ソレガシ}某ハ誰カ組ノ一番鎗ト分ケル也。

乍去、是ハ一番鎗ヲ二人論ズル時ノ心得而已、本法ニハ、一番鎗ハ其ノ一備ニナラデハナキ法ナリ。故ニ如斯ノ二人共ニ鎗ヲ合スルヲトバ、一番ニ番ヲ不分、二人ハ二人ナガラ、又ハ五人ナラ五人共ニ鎗ヲ合スルト云フ法也。譬ヘバ今度何国ニテノ合戦ニ何ノ某、イツレノ誰、以上五人鎗ヲ合ハスルト云フ心持也。

鎗場古例ノ支

一、惣テ軍ノ習ハ一番鎗一人進ミ行キ、鎗ハ二番^(おおかた)ハ多方惣掛リニナルモノナリ。古ヨリニ番鎗有ル事稀也。故ニ三番ト云フ事ナシ。惣ジテ^(やいば)刃ヲ不接シテ崩ス事多シ。ヨク々々互ヒニ強敵ニナケレバ、踏ミコタエ鎗ノ合ハスル事ハナキモノ也。

乍去、味方掛リ兼テ思惟スル場所ニテ、シカモ敵□ヘツゝ一番ニ番ノ鎗ハ合ハセテモ勝負不付、味方ハ尚惣掛ヲソナハリシ時、三番ト雖モ二三三人ニ而走り出一番ニ番□□ヘツゝキテ朋勢ヲ出離レ、紛レモナク鎗ヲ合スヲ三番ト云フモノ□□后一ツニ成ルワケモナキハ鎗トハ不云。

乍去、左ヤウノ事ハ無キ事也。一番サエ不合シテ其ノ儘見崩レニスル事、度毎ニアル事ナレバ、マシテ三番鎗マデコラユル事ハナキモノ也。惣ジテ古今トモニ鎗ノ有ル事ハ百度ニ一度カニ度カナラデハ無之モノ也。互ヒニヨク^(群)強敵ニテ真丸ニ立堅テ推向ヘ踏ミコラヘル場ニテナケレバ鎗ハナシ。或ハ見崩レ又ハム^(群)ヲ掛リスル故也。去ルホドニ、古ヨリ一番鎗ヲ誉ルハ理也。

但シ、三番目ノ働キハ鎗ト云フホドノ強ニナキカ、乍去、強敵ニテ崩シ兼ル場ナラバ、三番目ノ働キモ鎗ト免スベシ。

犬鎗之事

一、凡ソ鎗ニ似テ鎗ニテナキ品十五ヶ条アリ。是ヲバ鎗セリ合ヒトモ又ハ犬鎗トモ云フ。^(追)

第一ニ、敵間末ダ遠ク三町四町有ルニ、味方ノ兵一人二人マデニ遠掛ケシ、敵ノ備ヘカゝリ、鎗ニテタゝキ合フ^(ぬけがけ)夏、是ヲ拔懸ト云フ也。品ニヨリ法度ニ可行。

第二ニ、已ニ推合ヒテ追ヘツ返シツ爰彼ニ打散ジテ五人十人タゝキ合フ^(こゝかしこ)夏。

第三ニ、鎗場ト雖モ七八人ヨリ大勢進ミ出、鎗ヲ入レタゝキ合フ夏。

第四ニ、敵味方推合ヒ戦フ時ハ備面ニ有リ、兵皆タゝキ合フモノ也。是ヲ入込ミノ鎗セリ合ヒト云フ。鎗トハ不合也。

第五ニ、城攻メノ時、堀下ヘ付キ、或ハ矢狭越シ又ハ門ノ地伏ノ下或ハ堀ノ上ヨリ突合フ事。^(やぎま)

第六ニ敵ノ引退クヲ追行クニ、敵ノ振戻リ鎗ニ而拂北ニスルニ合タル事。^(はらいにけ)但シ敵ノ強者二人三人ニテ大返シニ返

シ来ル時、味方ノ真先ニ拔出テ行キ、兵一人二人ニテ踏ミコタヘ合スルハ鎗ナリ。是ヲ大返シ請止メト云フモノナリ。是ハ大返シ小返シニテモナク、只弱敵力追詰メラルゝヲ難交シテ振戻リ鎗ニテ拂□□□□。

第七ニ、一番鎗ヲ合スルト雖モ、^(敵)□ニ突返サレテ二番ノ兵□□□□其ノ身引キ退ク事。但シ大敵故一旦ハ立ラルゝト雖モ足行ニハ不北^(にげず)。返合々々振鎗拂退クニ、二番鎗ノ兵ヲ待付ケ、又取テ戻シ鎗ヲ合スルハ鎗ト云フ也。

第八ニ、柵ヲ隔テ幕ヲ隔テテ突合ス事。

第九ニ、鎗場ニテ働クト雖モ、馬上ニテ突合ス事。惣ジテ馬上ノ鎗ト云フ事ナシ。

第十ニ、夜討、夜込ノ時、敵ト鼻合ニ出合テ不及是非ニタゝキ合フ事。乍去、夜中ニテモ敵味方間ヲ隔テ、見付ツ詞ヲカワシ名乗カケ、ジリ／＼ト推合フ時、其ノ先本ノマゝニシテ鎗ヲ入レ、兵一二人ニ不限、七八人ニテモ勝

レテ進ムハ一番ヲ分ツ鎗ト定ムル事、日中野合ノ作法ニ同前也。

第十一ニ、敵ニ手キツテ追詰メラレ、後ヲ突ル、故ニ是非ニ不叶、身ノ火拂フニ振戻リ、鎗ニテタ、キ合フ事。但シ、敵ノ間未ダ遠キ時、能キ塩合ヲ見切り、強者共取テ返シ踏ミコタエ、追ヒ来タル敵ヲ待受ケテ合スハ鎗也。是コソ鎗之根本ト云フモノナレ。爰ニ云フハ左ニアラス、足行ニテ北ト背ヲ突ル、故、是非ナク振戻リ、鎗ニテ拂退キニスル事。

第十二ニ、敵味方對陣シテ其ノ間未ダ遠キニ先懸スル足輕大將共、敵ノ掛ルヲ見テ足輕ヲバ打捨テ自身下ニ立テ掛リツ、突合ス事。勿論敵ノ掛リ来ラザルニ、味方ノ足輕大將下ニ立テ己一身ノ働ヲ志シ、敵ヘ掛テ我備ヨリ一町モ二町モ先ニテタ、キ合フ事。

第十三ニ、敵ノ間遠キ時、一騎二騎ニテ物見ニ出、直ニ敵ヘ掛ルカ、又ハ先ニ居リ止マル敵ノ掛リ来ルヲ待テ、味方ノ先備ヨリ二町モ三町モ先ニテタ、キ合フ事。

第十四ニ、味方ノ物見拔掛ノ兵共、敵ノ物見拔掛ト出合フ先ニ而タ、キ合フ事。

第十五ニ、合戦又ハ迫合ノ勝負始□□□敵味方ノ心掛ノ者両陣ノ間ニ出、合戦或ハ□□□鎗ニテタ、キ合フ事。

右十五カ条ハ迫合ノ犬鎗ト号シテ鎗ト不云。右ニ註スハケ条ノ鎗ハ古ノ良將ノ定メ置ク所也。故ニ其ノ理至極ニシテ古今不易ノ律也。

城登之支

一、城ハ、某架^(空州)ラスヲ掘リ、浅キ所ヲ早く乗ルヲ手柄トス。左ヤウノ所ニハ敵大勢防ギ居ル故也。一番二番ノ次第ハ

其ノ手々々ニ可有。誰ガ手ニテハ誰一番乗、誰ガ二番乗ト云フ。但シ、一人真先^(まつさき)ニ登ルヲ一番乗ト云フ。若シ真先ト雖モ二人トモ有レバ一番乗トハ不云。只先登リト云フ。先登リハ五人七人迄ヲ先登リト云フ。少シノ遅速ヲ不論、一番乗ノ一人ニ續テ又一人抽力拔出乗ヲ二番ト云フ。但シ七八人マデハ二番乗ト免ス。又、一番シテ鎗ヲ合セタルト云フハ、堀口門口ニ不限、其ノ一番乗ノ兵ガ先ニ攻入リツ、敵ハ二人三人有レドモ門口カ道筋カ何サマ要ノ喉首ノ所ヲ堅ク防ギ守ル備ヲ設ケ居ル処へ、彼ノ一番乗ノ兵カ、又真先ニ攻入テ鎗ヲ合スヲ云フ也。鎗ヲ入レルト云ヘドモ、ハヅレノ場ナラバ鎗ト不云、一番乗ニテ一番鎗ナラバ其ノ口ノ一番則チ一番鎗ト云フ。乗ル所ハ一番ニテ鎗合ス所ハ二人トモ有レバ一番乗并鎗ヲ合スルト云フ。乗リ込ム所ハ先登リニ而鎗合ス所ハ一番ナラバ、何ガシハ其ノ口ノ先登リ并一番鎗ヲ致スト云フ。敵ハ大勢有レドモ爰彼ニ散リ居ルカ、又道筋ニテ備モ不設処へ掛ケルハ鎗トハ不云。堀裏へ飛下リ、則チ堀ヲコシテタゞキ合フモ鎗ト不云。右ニ出ル通りニ、本丸へノ道筋カ、又ハ肝要ノハマリヲ敵ハ一二人有レドモ備ヲ設ケ防ギ守ル処へ掛鎗ヲ入ルヲ鎗トハ云フ也。勿論諸軍ニ先立チ紛モナキヲ鎗トハ云ヘトモ□□……(以下三行不明)忽テ鎗モ城登モ、其ノ一二ヲ分ツ程ニテハ、細々一足ノ違ヒヲモ吟味セネバ不叶、夫レニテハ物ノ吟味セハシク成ル故ニ、古ヨリ一人先ニ進ムヲ一番トシテ、二人トモ進デハ或ハ鎗ト云、城乗リヲバ只先登リト云フ。船軍法同前。

乗込之支

一、敵中へ只一騎先ニ馬ヲ入レ乗リ崩スヲ一陣ト云フ。續ク兵二騎三騎迄ヲ二陣ト云フ。ソレヨリハ乗込ムト云フ。若シ先ニ乗込ムト雖モ、二人トモ有レバ只先陣ト名ツケ、一陣トハ不云。其ノ法、鎗ニ同ジ。先陣ニ已ニ二騎トモ乗込メバ、續ク兵ハ二陣ト不云。一陣ニハ二陣アリ、先陣ニハ二陣ナシ。去ルホドニ、是モ敵ノ間已ニ十七八間ニ

引受ケテ鎗モ有ルベキホドニ近付ク時ニ乗込ムヲ、一陣、
二陣、先陣トハ名付ケテ称美シスル也。敵ノ間遠キ時ニ乗
込ムハ拔ケガケト云フ也。偕又、川ヲ渡ルモ一陣、二陣ノ
作法、先陣一陣ノ分、右同前也。但シ、馬上ニ鎗ヲ持テ突
合ヒタリトモ鎗トハ不云、一陣ハ一陣、先陣ハ先陣トバカ
リ云フモノ也。

鎗脇太刀之亘 写真(9)

一、懸口、請止メ退口ニ不限、鎗ヲ合スル兵ニツヅキ五人六
人ニテモ刀ヲ拔テ鎗脇ヲ詰メ、力ヲ添ルヲ鎗脇ノ太刀ト云フ。況ヤ鎗下へ飛込ミ敵ヲ切拂フハ大成ル誉シ也。但シ、
鎗脇詰ル兵多クシテ三人四人ニ不過モノ也。子細ハ大方鎗ヲ□□□□(以下数行破損甚だしく不詳)

鎗脇弓之亘

一、鎗合スル兵ニツヅキ、弓ヲ持テ掛リツゝ鎗脇ニ立チ、敵ノ勢掛ル校先ヲ矢次ギ早ニ射□カシ、鎗合スル兵ニ力ヲ
添ルヲ鎗脇ノ弓ト云フ。但シ、時ニヨリ鉄砲ニテ鎗脇詰ル事モアリ。鎗脇ノ弓鉄砲ハ幾人ニ不限ナリ。左云フテモ
多クハ又ナキモノ也。古ヨリ五六人ヨリ多キハ不聞。

鎗下高名之亘



写真(9) 『武律』のこの頁以後になると、とくに左側の方が判読できない。

一、鎗脇ヲ詰ル兵ニテモ、又ハ後ヨリ走り續キタル兵ニテモ、刀ヲ抜テ鎗合ス最中ニ飛込ミ切伏セテ鎗合ス下ニテ首ヲ取ルヲ鎗下ノ高名ト云フ。但シ、味方ノ鎗合ス兵ノ鎗付タル首ヲ鎗ノ兵討取ルモ同前ニ鎗下ノ高名ト云フ。敵味方少シモ不退、勝負ヲ決スル最中ニテ取りガタキ首故ニ賞翫スル也。鎗下ノ功名モ三人四人有ル事モあり。又一人モナキ事モ可有。但シ、敵モ味方モ惣テ手ノ先ヲ掛ケ虎口へ出テ鎗ヲ合スホドノ剛者、唯今ヲ限リト白刃交ヒ死生ヲ一ツ□□□□(以下数行破損甚だしく判読不能)

写真(10)



写真(10) 『武律』の後半部分は、和紙が綿のように「塊」となっている。

- 注(1) 虎口。虎の口とも云う。一般には非常に危険な場所を指して云う。城攻めのような場合には、守る側からはその城の入口で最も守りの堅い区域、攻める方からすれば、逆にここが一番危険の場所で、生命を失う率の高い場所となる。
- (2) カセギ。命をかけて働くこと。
- (3) 鏑。兜の鉢の下端に設けられ、前面を除き、頸のまわりを覆う防具。
- (4) 勇め。「奮い立たせ」の意。
- (5) 遠北。遠くまで逃げてゆくこと。
- (6) 面も不振。「後ろをふり返ることもなく」の意。
- (7) シタルク。「ねばり強く」の意。
- (8) 白ミテ。「勢いがにぶつて」の意。
- (9) シタリトモ。とんでもないことであるけれども。

- (10) シタリ。「よくやった」の意。
 (11) 嚙ト。特別な読み方で、多くの人の一時に高く声を出す様のこと。
 (12) 葉武者。木の葉のようにうるたえる武者。兵。
 (13) 鋒。軍勢の先端又は中央。
 (14) ムラ掛り。一団となつての攻撃。
 (15) 塩合。しおどき。

解説

1、本資料は写本であるが、もともと「本多忠勝」が息男「本多忠政」や家臣に授けた書となつてゐる。ただしこの原本の所在は不明である。『近世武道文献目録』(入江康平編、第一書房、一九八九)は、全国各県の公立図書館に所蔵されている武道関係の資料を網羅した文献目録であるが、『武律』という書名は載っていない。原本の書名は、もしかしたら『武律』でなく別の書名であつたのかも知れない。

ちなみに、伊勢貞丈(正徳五―天明四(一七五五―一八四四)江戸中期の有職故実研究家)の『安齊隨筆・卷之十八』(故実叢書編集部編、一頁、吉川弘文館、一九五二)『軍師高名』の項に次の説明がある。

独身のかせぎは鑓を合するを第一とす。総じて働きの強きを誉めて呼ぶ事は、古より鑓ほど強きかせぎはなき故に、末代の諺に云ふ、其の品八条あり。所謂一番鑓、二番鑓、小返鑓、大返鑓、何入の鑓、城攻の鑓、籠城の鑓、請留の鑓。是にさし続きたる働き四條あり。一番乗、乗込鑓、脇太刀鑓、脇弓。此の外高名七条あり、鑓下高名、鑓場高名、似て高名、捉討高名、崩涯の高名、場中高名、凡そ鑓に似て鑓にてなき品十五カ条あり。但しイスヤリと云ふ。

右の八条、四条、七条(鑓脇高名が抜け「似て高名」が本資料では「退口高名」としてゐる)の各名称は、本資料とほぼ同じである。このことから推察すれば、『武律』という書名でなく『軍師高名』で流布していた軍法の書であつたと思われる。

また『武律』であれ『軍師高名』であれ、この書の内容には『甲陽軍鑑抜書前集』

(小幡景憲著、正保二年頃(一六四五)『甲州流兵』(法)所収、一八九頁、新人物往來社、一九六九)

が参考にされたのではないかと思われる。それは次の一節があるからである。

一 備にての侍衆働の誉定九ヶ条の事

一に一番鎧・二番鎧・鎧脇三様は刀鎧脇・弓脇鎧・鉄砲鎧脇。

二に場中の高名。

三に場中にて手負を引懸本の場に戻りて、戦誉の事。

四に敵強くして、味方退事一場にて、幾度も有之なり。是は強敵或はつよく無之共、敵多衆には懸引互に有る者なり。

五に右の小返の誉、或小返際の高名、或は小返の場中の高名、或は崩際の高名、是は青葉者にても高名なり。せわしき場にての働きゆへ誉なりと被定。

六に後れ口の高名大誉なり。或は後れ退き引に、味方の手負引懸退く誉。(以下略)

右のような「侍衆」の合戦における評価は、本資料に少なからず影響していると考えられる。

2、「武律」の著者については、本文中に「私の所存ヲ書キ加フ」とあり、「本多忠勝」の側近の一人と思われるが、その「私」が不明である。

3、本多忠勝。天文一七〇二(五四八—一六一〇)慶長一五。三河生まれ。本多忠高の長男。徳川家康に仕え、永禄三年(一五六〇)一三歳で初陣。姉川の戦、長篠の戦などで抜群の戦功をあげ、酒井忠次、榊原康政、井伊直政とならび徳川の四天王と云われた。初陣依頼五七回の合戦を経験し、身に傷痕をとどめなかったという。六六歳没。

4、本資料は「表紙」がなく仮綴の冊子本ではあるが、後半の部分が「綿」のように「塊」となっている。また第一頁に「浅利文庫」の印が押されている。このことは、浅利家には相当量の資料が所蔵されていたと思われるのであるが、今まで紹介した資料にはこの印がなかった。かなり散逸したと思われる。

5、本資料の内容は、合戦における下級武士の武功の評価を中心として述べている。それも弓矢や鉄砲ではなく、鎧を主な武器として、直接敵と対した時の様々な状況のもとにおける武功の評価である。

八、小笠原流諸礼（蜷）（承前）

8、『幕一流之書』

卷子本

幕一流之書

写真(1)

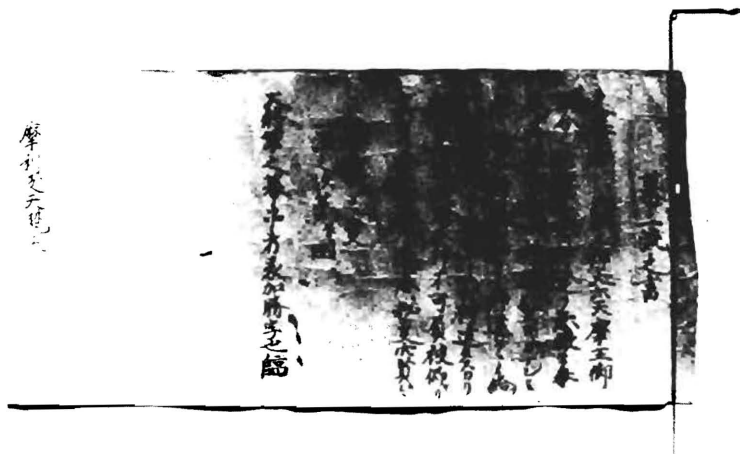
夫幕者、天照太神大六天摩王御取合之時、摩王小神達
ヲ悪眼ニテ奉見、其眼之光ニ小神達驚キカナシミ給フ時、
太神ノ御袖ヲ小神ヲ、イ給ふ。广之眼ノ光ウスクナツテ
小神達タスカリ給フ。其時天照太神不可負被仰ケリ。其
ヨリ以来幕と云也。忝モ秘吏穴賢々々。

幕田町之吏

一流之次第并圖

大將軍之幕串者表加勝字也。臨

摩利支天梵天



写真(1) 『幕一流之書』の書き出しの部分。「臨」の字の次を書くべき字があった筈である。

幕加持主人具足シテ唐櫃腰ヲ懸、東ニ向テ師ハ南ニ向、東ニ幕ヲ打、先護身法。

次二九字劔吊ヲ以テ幕ヲ加持ス。

判^ハ決^ケ花^ハ不^フ良^リ死^シ氣^キ死^シ何^{ナニ}榮^ハ不^フ

一
辺
唱
テ

摩利支天咒百返唱(遍)テ噫々如律令ト唱ヘシ。千金莫傳穴賢可秘々々。

一、幕ヲ可書字十五有。秘吏ナレハ書置ニヲヨハス。(及)可
口傳ス。

一、幕ノ大夏次第。布六端ナリ。一段平繩ナルヘシ。五端ハ幕右ノ一端ヲ四ツニワリテ、一ツハ黒ク、一ツハ白ク、一ツハ青ク色ナルヘシ。相成ル一ツハ三ツニハリテ乳スヘシ。遠士ニテ玉女ノ方ニ向テタツヘシ。ヒカエテハ聞神ニ可向。ヤリ刀ニタツヘシ。

一、縫事ハ手ノ歳ノ役ナリ。布長サ三十尺ナリ。但陰陽ノ幕ニ口傳。

一、本式ニハ幕布作夏、男ノカタライナキ女、不然ハ不生ノ女、不然ハ買布ニテ可用。其時ハシシカキ布ヲ本トス。幕ノ尺ヲ定ヘシ。長キヲ平繩ニスヘシ。

一、乳ノ數、廿八者天ノ廿八宿ヲ表ス。卅六ハ卅六禽ヲ表ス。依之太將ノ廿八用也。

一、乳ノ夏、廿八宿表儀若ハ法華廿八品ヲ表す。作精半
テウニ是ヲ表儀ナリ。

一、幕串尋常八本也。八大龍王ヲ象ル。尺ハ凡八尺歟。

一、幕加持ノ時、本尊ニ八幡摩利支夫、又人ニヨリ我氏神ヲ書請シ申ス。勝軍本ヲ尤立、洗米、香炉三本ヲ備ヘシ。主人ト幕ノ間瓶子三具銚子提アルヘシ。此内一具ヲ蝶形ニ包、同銚子モ提モ蝶形成ヘシ。肴ハ一番ニノシ、二番二栗、三番二昆布引渡シナリ。肴ヲ取ル心持、打テ勝テ悦ト取ヘシ。

一、師匠ハ祝ヨリ前ニ護身法、次ニ九字、其後劔吊ヲ以テ一ノ幕串ヲ乳ノ本ニ臨、二兵、三鬨、四者、五皆、

摩利支天梵天

乳廣六分長寸一分四釐可分舍等
縫目有叶口侍

命田町下縫糸毫縫白糸口侍

卧縫

室	壁	奎	婁	胃	昂	畢	觜	參	井	鬼	柳	星	張	翼	轸	南	亢	旦	房	心	尾	箕	計	牛	女	虛	危
聖觀音	兵部秋	降三世	葉	阿	有	王	釋	皆	陳	天	天	天	天	天	天	天	天	天	天	天	天	天	天	天	天	天	天
星	星	星	星	星	星	星	星	星	星	星	星	星	星	星	星	星	星	星	星	星	星	星	星	星	星	星	星
星	星	星	星	星	星	星	星	星	星	星	星	星	星	星	星	星	星	星	星	星	星	星	星	星	星	星	星
星	星	星	星	星	星	星	星	星	星	星	星	星	星	星	星	星	星	星	星	星	星	星	星	星	星	星	星

乳敷子中次六八八尺傳

荒神子繩金剛童子不動明王

六陳、七烈、八二在、九二前、餘ハ勝字ヲ以惣幕ヲ加
持スルナリ。

一、氏ナクシテ幕ヲ打曳アルヘカラス。但氏アル人ニ氏
ヲユルサレウツヘシ。亦氏アル人幕ヲウチ申タルハ大
事アルヘカラス。可秘々々。

内幕作様之次第

(暖簾)

一、田町ノ数十二ナリ、表躰ノレント同前ナリ。乳ノ廣
サ長サ外幕同前ナリ。田町ノ付様同前。

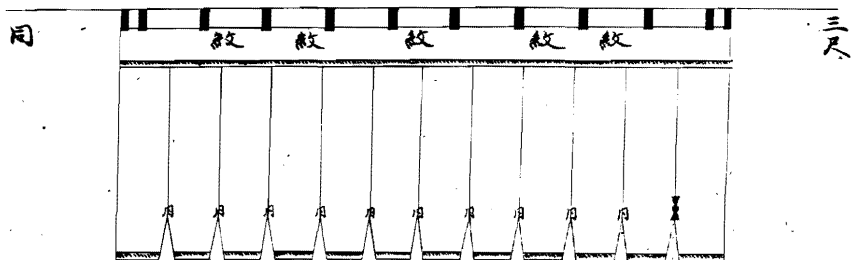
一、乳ノ数ハ拾七モ又ハ十五モ十二モ付ル也。但シ十五
可然候也。何モ好ミニヨルヘシ。

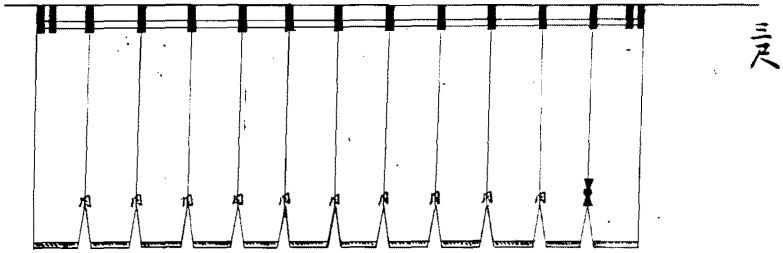
一、長サ縫タケ上ノ横田町トモニ五尺也。又ハ六尺ニモ
五尺五寸ニモスルナリ。何モ同前ナリ。主好ミ次第也。

一、緞子ノ時ハ乳モドンスナルヘシ。色々有ヲハ上ノ横
田町ヲ浅黄ナスヘシ。

一、平縄ハ外幕同前也。縫サシハ同返シニスル也。

同





三反

- 一、菊トチハ三寸也。廣一寸、下縫^(閉)ハ五分程折^(三針)テミハリサシニ縫ナリ。田町ノレンハ上ヲモヲリテ縫候^(折)テ、^(二)儲乳ヲ付ルナリ。
- 一、綴子ニテシタツル時ハ、中ヨリワリテヨシ。何モフセヌイニテヨキナリ。^(下色)^(伏縫)
- 一、加持之夏、外幕ト同前、条々可為。口傳。

小簾作様之事

一、小旗仕立様。大小之儀ハ主次第ニアルヘク候。不定候。長ク候ハ乳数卅六又廿八能候。又小ク候ハ十二九ツモ能候。両方端シヲハ外ノ方ヘ五分ホト折テ可縫。乳ノ長サ竿ニ付所幕ト同前ナリ。但シ小旗ノ大小ニヨリ乳ヲ短クモスルナリ。故実可有之夏、肝要ナリ。同上ニ付候ハ、少シチイサク候テモ見能様ニ可付。吉日吉時ヲ可撰。

小笠原大膳太夫
写真(12)

長時

西ノ横之事

外方ニニ縫

武蔵月伏縫

五形 下乳(五二五)二付

外方ニニ縫

大菩薩

蘇我皇太神宮

春日大明神

五形

前所(五二五)合、乳敷丈祖丈、不可方之傳

右此巻卷当家別而為
秘事之間夢々麁相他言
他見有之間敷者也

(一六七五)
延寶三乙卯

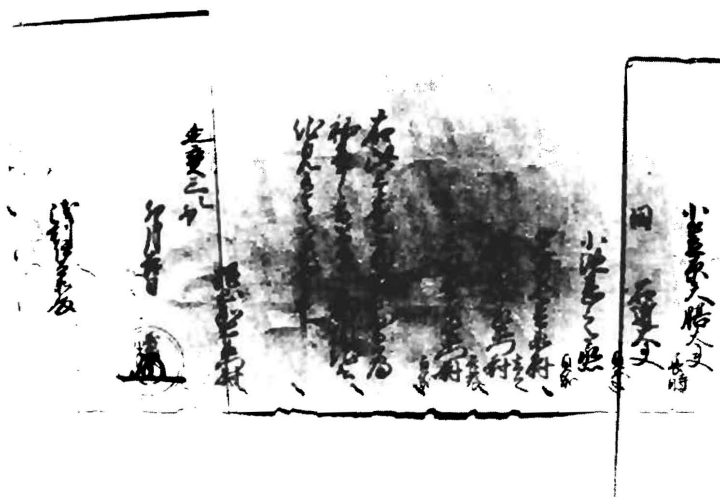
卯月吉日

茂基 朱印・花押

浅利伊兵衛殿

横山嘉右衛門尉

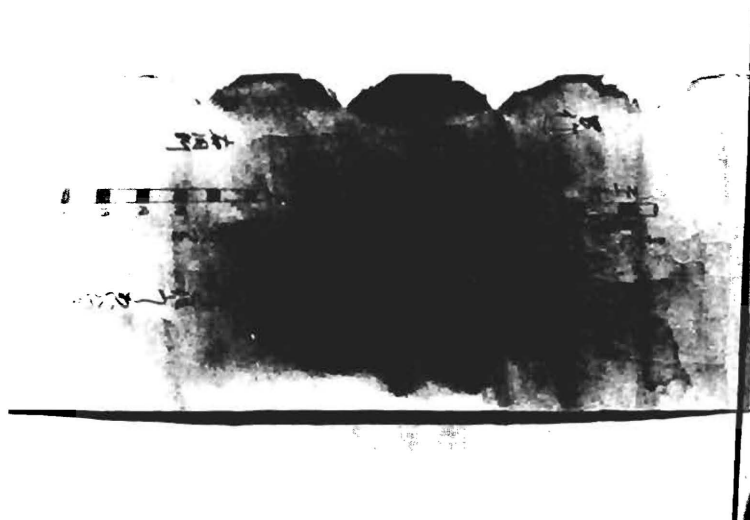
同 右近太夫
貞慶
小池 甚之丞
貞成
岩間 七兵衛尉
玄之
廣瀬 三左衛門尉
吉孝
三好五郎左衛門尉
貞成



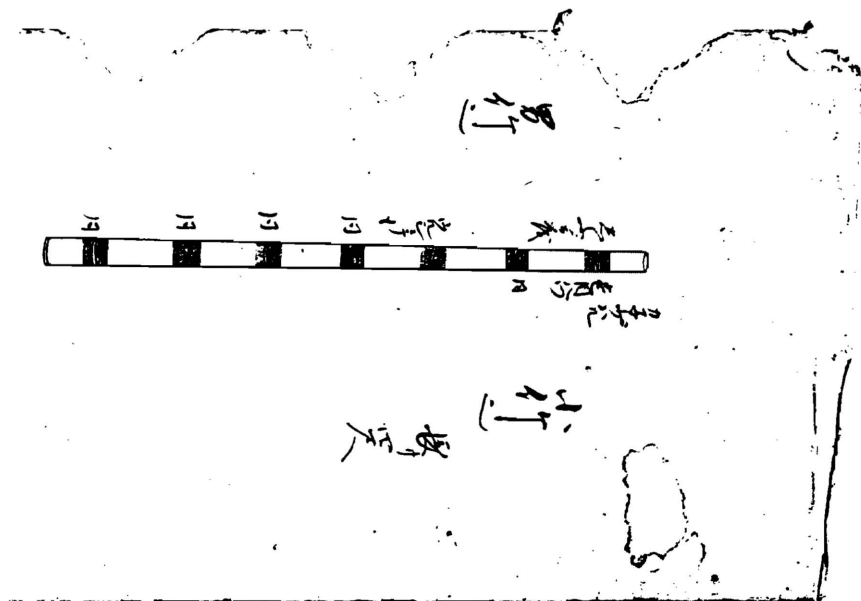
写真(12) 『幕一流之書』の奥書き。

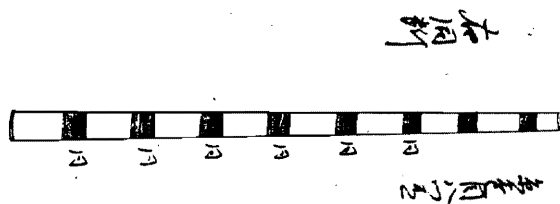
9、指物竿之書
写真(13)

卷子本

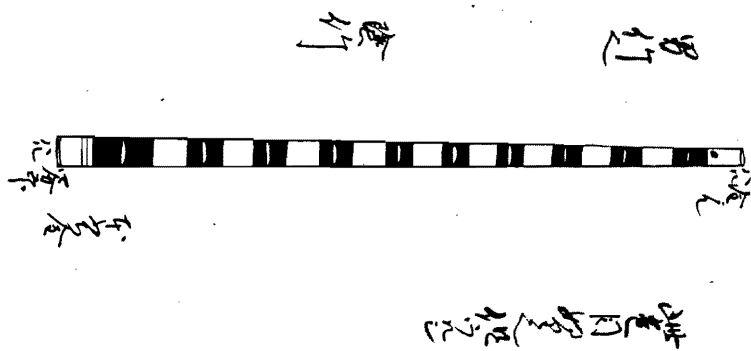


写真(13)「指物竿之書」(仮称)の書き出し。右の方は切れている。



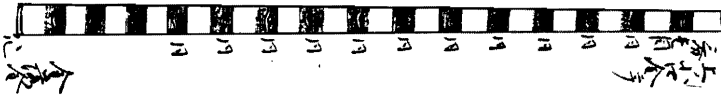


新田



1547 1548

弘前大学教養部「文化紀要」第33号第2



弘前大学教養部「文化紀要」第33号第2

弘前大学教養部「文化紀要」第33号第2

弘前大学教養部「文化紀要」第33号第2



弘前大学教養部「文化紀要」第33号第2

大指物竿

一、長サ二間半、但其家之望有、又ハ大将之望、或ハ古
 来持来候^(もちきたり)さし物、竹、家ニヨリ三間餘も有、定候寸ハ
 右尺也。

一、大勢小勢之分限ニよつて五本或ハ六本八本。

右是も定候通ハ五本也。竹のわ寸ハ竹によるヘシ。

金ニて竹のこ口うつくしくなるほときわにはるなり。

小笠原大膳太夫
 写真(14)

長時

同 右近太夫

貞慶

小池 甚之丞
 貞成

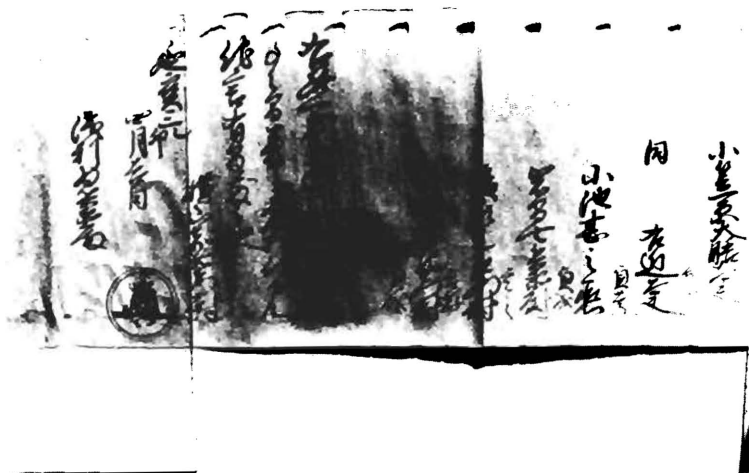
岩間 七兵衛尉

玄之

廣瀬三左衛門尉

吉孝

三好五郎左衛門尉



写真(14) 「指物竿之書」(仮称)の奥書き。

貞成

右此一巻当家別而為秘

事之間夢々儼相他見

他言有間敷者也

横山嘉右衛門尉

(二六七五)
延寶三之卯

四月吉日

茂基 朱印・花押

浅利伊兵衛殿

10、幕縫方之書
写真(15)

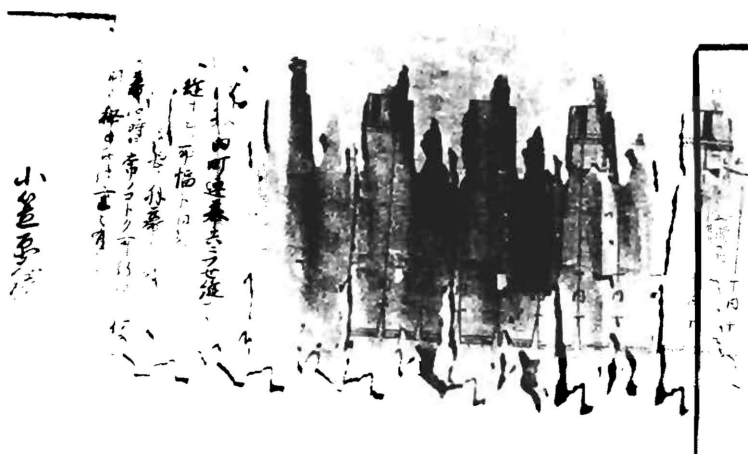
卷子本

一、□幕田町連幕共ニフセ縫ナリ。

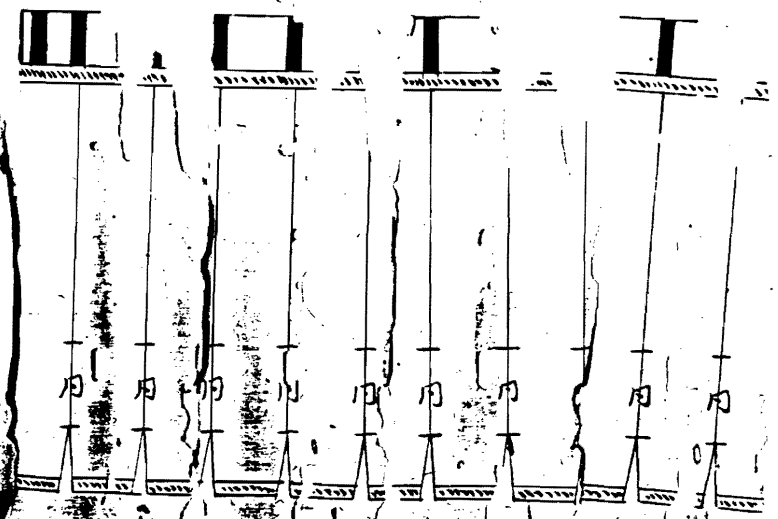
一、縫サシハ布幅ト同前。

一、□□□□長サ羽幕ト同前。

一、幕□□時ヲ常ノコトク可行。様躰何モ同前。秘事口
傳重々有之。



写真(15)「幕縫方之書」(仮称)の部分。この右の方はかなり切れていると思われる。



此本町連泰共ニ延ナリ
紐サニハ布幅トハ

一壽の時帝ノコトク可ク振テ
日の格口は主なる

小道要腰

同 右

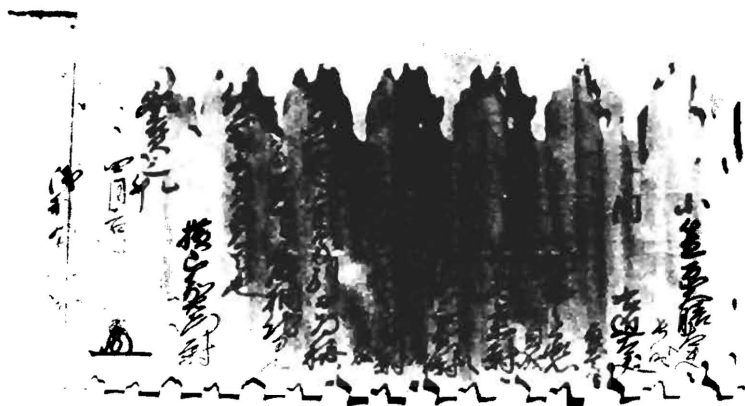
山崎
白
山崎
白

右此一巻当家別而為秘
事之間夢々鹿相他見
他言有間敷者也

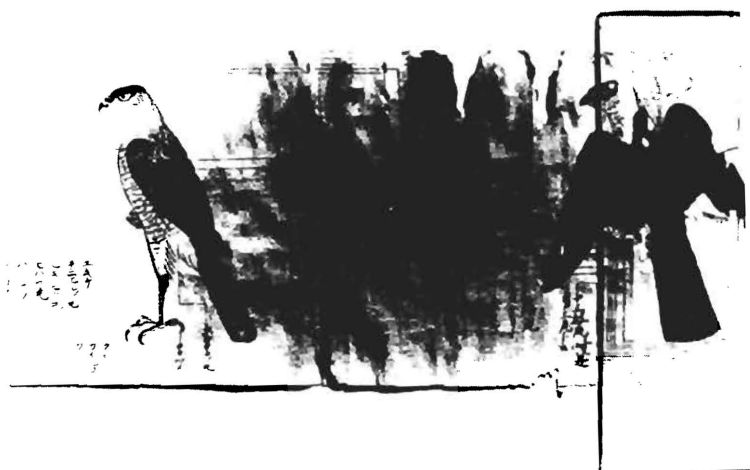
(一六七五)
延寶三乙卯

横山嘉右衛門尉

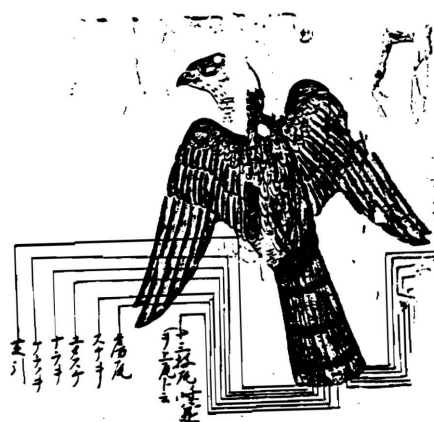
小笠原大膳大夫 写真(16)
長時
同 右近大夫
貞慶
小池 甚之丞
貞成
岩間 七兵衛尉
玄之
廣瀬三左衛門尉
吉孝
三好五郎左衛門尉
貞成



写真(16)「幕縫方之書」(仮称)の奥書き。



写真(17)「鷹之書」(仮称)の書き出しの部分。



11、
鷹之書

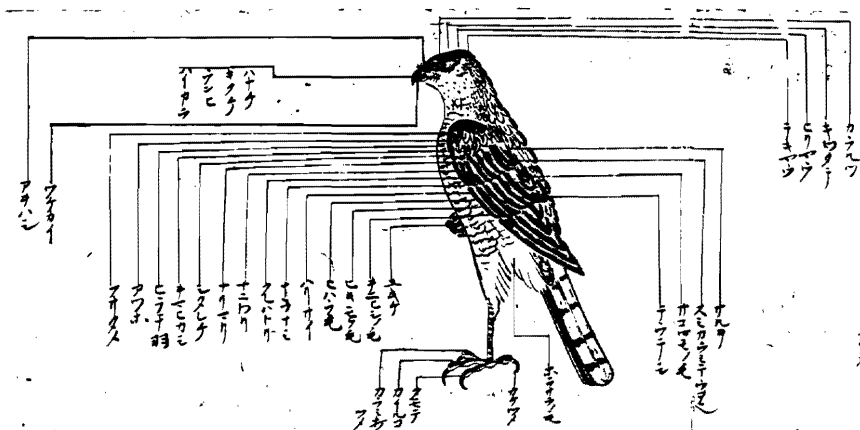
写真(17)

浅利伊兵衛殿

四月吉日

茂基 朱印・花押

卷子本



一、鷹渡申段、大緒品上中下事、主人へハ二わけほと
き渡ス。同輩へハ半分のへて渡へし。皆のへて春鷹
に品有之。

一、ふち上中下有。是口傳、不及記。

一、つなき様、弟鷹は七くさりとまらは房下へ成通ハ
房上ニナル。口傳なくてハ合点有間敷候。

一、兄鷹ハ五くさり、房の次第右同し。

一、小鷹ハ三くさり、房右同前。

一、四季其外月見花見又ハ社寺房風ほ□ほこなとして様々有之候へ共難記。口傳なくてハ合点不参候。

小笠原大膳太夫

長時

同
右近太夫

貞慶

小池甚之丞

貞成

12、
箭之書

写真(18)

卷子本

浅利伊兵衛殿

四月吉日

茂基 朱印・花押

(一六七五)
延寶三乙卯

横山嘉右衛門尉

右此一卷雖為秘事別而御
熱望傳達早努々鹿相他
見他言有間鋪者也

岩間 七兵衛尉
玄之
廣瀬三左衛門尉
吉孝
三好五郎左衛門尉
貞成



写真(18)「箭之書」(仮称)の書き出しの部分。

山

山

山

山

山

山

山

山

山

山

山

山

山

山

山

山

山

山

山

山

山

山

山

小笠原大膳大夫

浅利伊兵衛殿

長時

同 右近大夫

13、婚礼持物之書

写真(19)

貞慶

小池 甚之丞

貞成

岩間 七兵衛尉

玄之

廣瀬三左衛門尉

吉孝

三好五郎左衛門尉

貞成

右此老卷当家別而為秘事

之間夢々麁相他見他言

有之間數者也

横山嘉右衛門尉

(一六七五)
延寶三乙卯

卯月吉日

茂基 朱印・花押

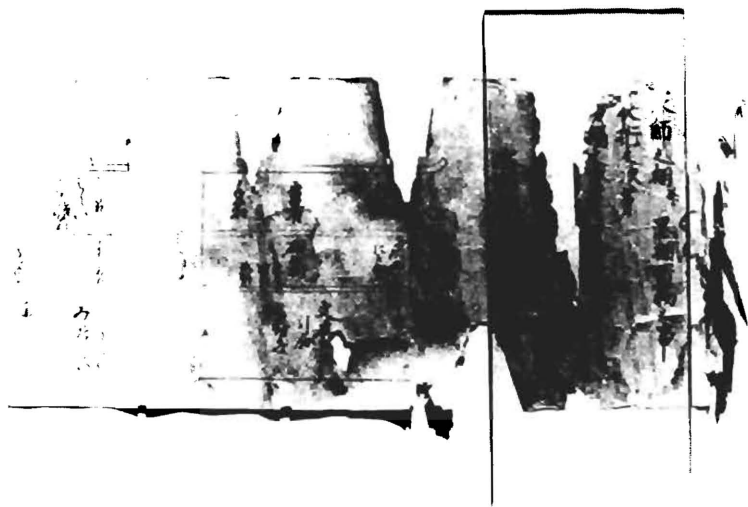
一、水師之棚并黒棚置之事⁽¹⁾

一、衣桁之次第^(いこう)

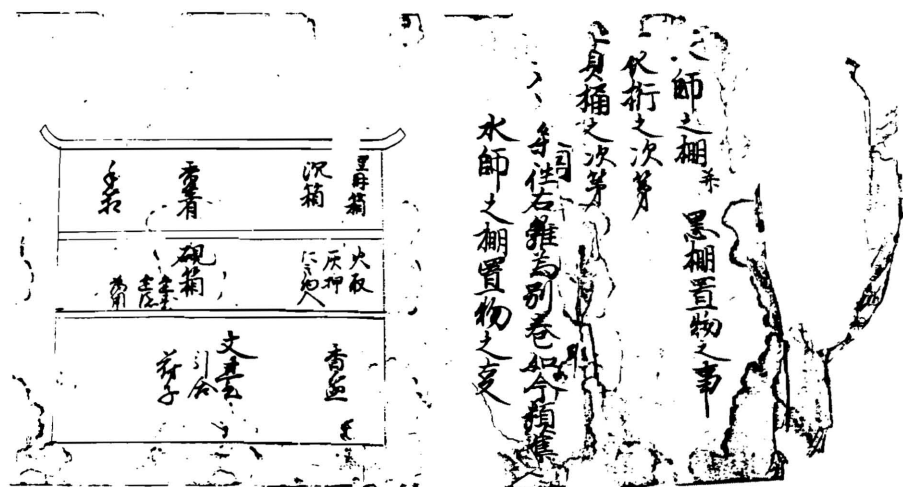
一、貝桶之次第^(かいおけ)

一、廣蓋之圖^(ひろぶた)

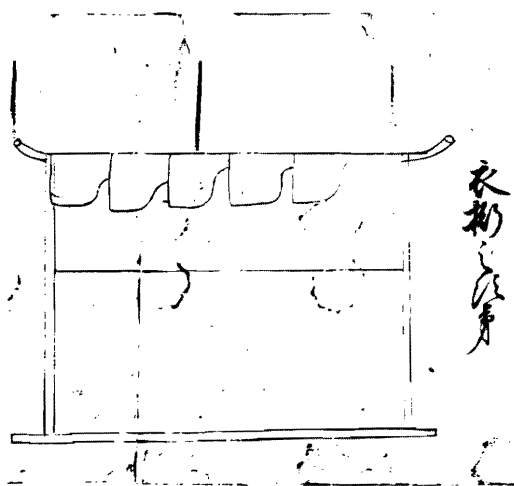
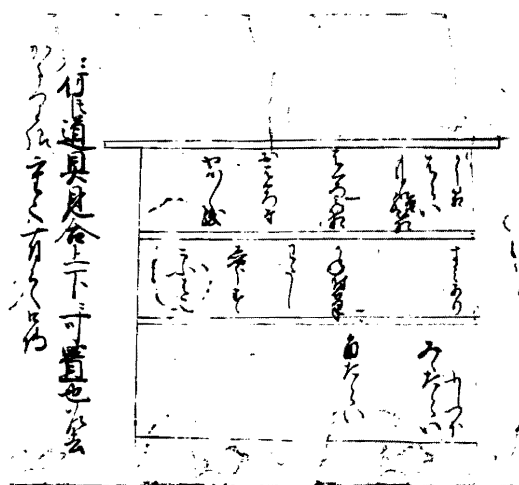
卷子本



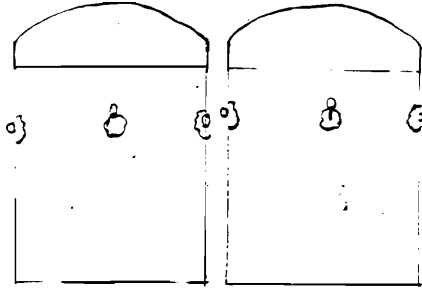
写真(19)「婚礼持物之書」(仮称)の書き出しの部分。



如何トモ道具見合上下ニ可置也。乍去
 (飾)
 かさり様、重々有之口傳。



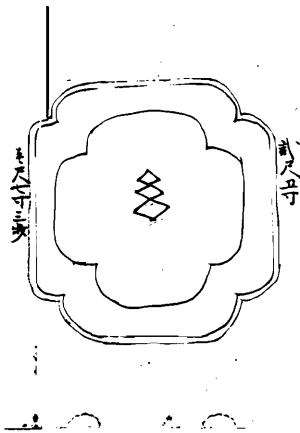
衣桁之次第



貝桶之次第

貝桶次第⁽²⁾

右^(飾)かさり様、宗長之息女武田甲斐守殿^(小笠原)
得御祝言有し時、如斯かさり上候。
数ハ定れる例有之といへとも、大かたしるし
置候。乍去、当代ハそのもやうによりて^(模倣)
かさるへし。何も五色をかたとり候而
その外別可有候。下かへを上る可懸条々。
口傳有之なり。



廣蓋圖

廣蓋之圖^(ひろふた)⁽⁵⁾

一、貝桶請取渡しの支。渡ス者貝桶を
右之脇に置、為一禮地貝を前江直し⁽³⁾
貝桶を蓋の上に置。其次に外^(蓋)を
相手の右のかたに直し申時、請取者
を少右へよせ、扱貝桶を入右へ直し^(蓋)
候所へ、又たし貝を如右之渡し右之^(出)
ことくに請取、有一礼て立退。色何も
大事条々口傳有之也。

一、廣蓋之長式寸五尺、横一尺七寸三步、何も
 内のりなり。ふちめんより高サ二寸壹歩
 かゝミともにふちのかた迄三寸なり。かゝミ
 のつけきわに壹歩のきちやうめんをとり、
 かゝミ内をくるなり。はたより内のくり
 目迄式寸八歩あり。四方角を丸目にする
 なり。ふちはたに、内外に蒔繪をするな
 り。口傳有之。

右此一巻当家別而為秘
 事之間夢々簾（相）他見他言
 有間敷者也

小笠原大膳太夫

長時

同 右近太夫

（一六七五）
 延寶三乙卯

横山嘉右衛門尉

貞慶

四月吉日

茂基 朱印・花押

小池 甚之丞

貞成

浅利伊兵衛殿

岩間 七兵衛尉

注(1) 黒棚。黒漆で塗った三階の棚。女子が香具、元結箱、櫛箱、爪切り箱など手まわりの道具をのせる。室町時代以後は

玄之

廣瀬三左衛門尉

吉孝

三好五郎左衛門尉

貞成

婚礼の持ちものとなった。

- (2) 貝桶。貝合せの貝を入れる六角形の桶。二個で一組となる。近世には嫁入り道具の第一の調度となった。
- (3) 地貝。貝合せで場に伏せて出す貝。
- (4) 出し貝。貝合せの際、各自が持つて場に出し、地貝に合せる貝。
- (5) 広蓋^{ひろがた}。衣装箱のふた。昔、衣を人に与える時、これにのせて与えたと云われる。

14、婚礼膳之書

写真②

卷子本

右大形如此。何も其人にした

かふ間、一邊には不可定。口傳

重々。

一、盃ハ土器一ツ三方に据可出ス。待□□

其外盃ヲのますへし。

此酒通テ女房□□ヲ□をなすへし。

此時食ヲ可出。男も座敷へ出るへし。

小笠原大膳太夫

長時

同 右近太夫

貞慶

一、膳の様躰、時にしたかひ、其人の

(從)

ところにまかすへし。

小池 甚之丞

貞成

一、引物いろく有へし。此時酒にて

岩間 七兵衛尉

玄之

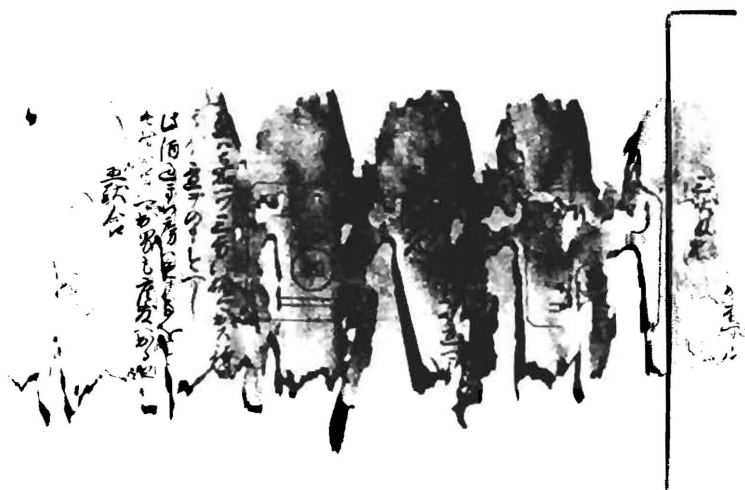
一、菓子

三方

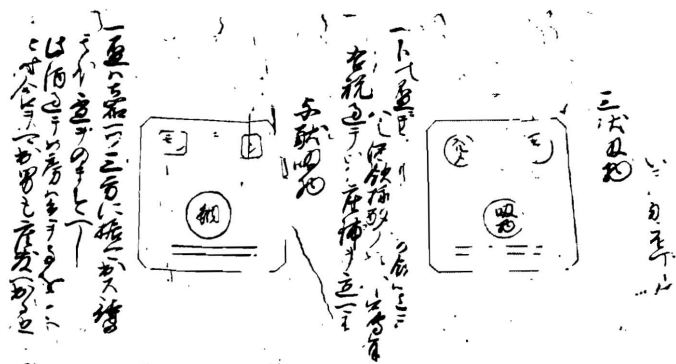
一、茶

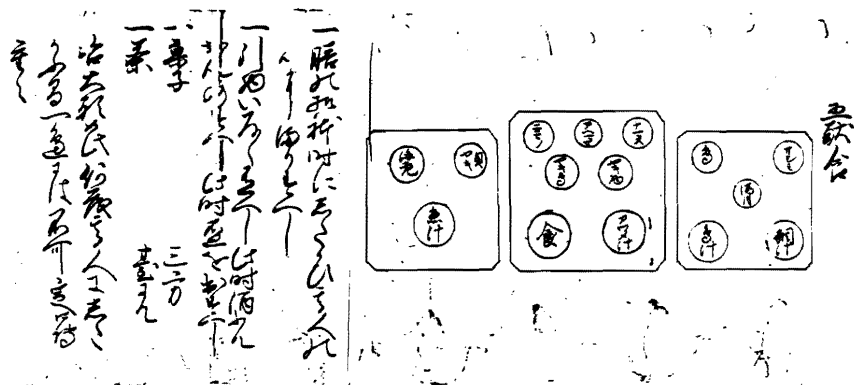
臺にて

廣瀬三左衛門尉



写真(20) 「婚礼膳之書」(仮称)の書き出しの部分。右の方が相当切れている。





此一巻当家別而為秘
事之間夢々麁相他見
他言有間敷者也

(一六七五)
延寶三乙卯

四月吉日

浅利伊兵衛殿

吉孝
三好五郎左衛門尉

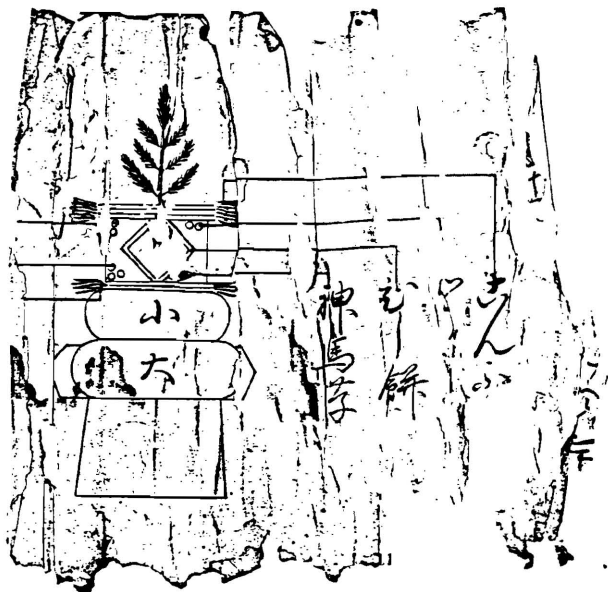
貞成

横山嘉右衛門尉

茂基 朱印・花押



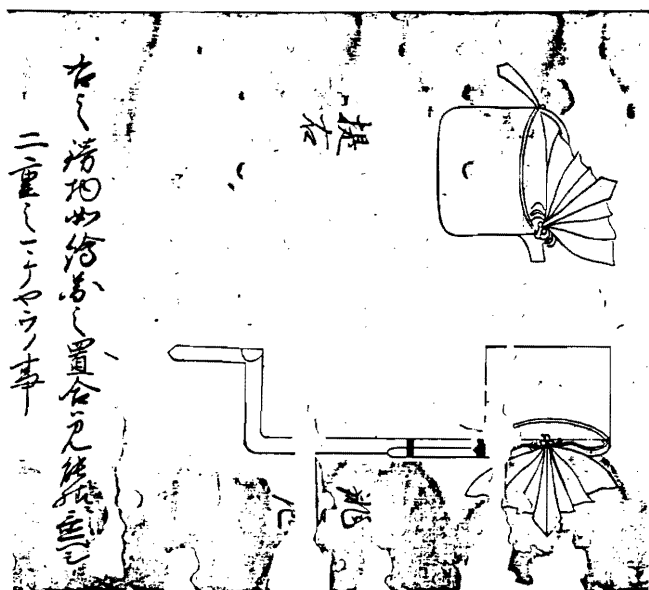
写真(21) 「饗膳鋸之書」(仮称)の書き出しの部分。



15、饗膳鋸之書

写真(21)

卷子本



右之鍔物如繪圖之。置合ハ見能様ニ置ベシ。

二重之マケヤウノ事^(曲)

一、下ノ臺ノ足二寸、同フチノ高サ一寸五歩、折敷之廣^(おしき)サ一尺一寸四歩。

一、上ノ臺之事。腰ノ高サ七寸四歩、同フチノ高サ二寸、同折敷一尺五歩、三方ニサマアリ。

同二重盛様之事

一、餅敷三枚、厚サ二寸宛、下ノ餅ハ折敷ノ□リニ切合^(緑)フチト同高サニスルナリ。二枚目ノ餅四方一寸宛洩ユマセ重ル也。同三枚目ノ餅、是モ四方一寸宛ニ洩ユマセ三段ニ重ヌルナリ。

同上ノ鍔物之事

一、真中ニハ三重ニ枝持之有松ヲ立ル也。松ノマハリ^(きくちげ)ニ栢子三ツ、柿三ツ置ナリ。

一、鯛二ツ腹ヲ合、紙ニ包、□ヲ一ツ取、中ヲ水引ニテ

結、頭ノ方ヲ饗ノ膳ノ方ヘ成ル様ニ置也。

一、昆布二枚見合置ナリ。中ヲ水引ニテ結也。

一、折敷四所ノ角ニ高立ヲスル也。カウ立ノ手先何モ行^(高)合様ニスル也。

一、海老頭ヲ上ヘソロヘ、腹ヲ上ニ成シ串ニサシ、高立ニシテ折敷四所之角ニ置ベシ。但シ髭ヲ唐糸ニテカラミ、二重廻スベシ。

一、松ニ金銀之露ヲ可置ナリ。

一、餅ノ切目ニハ何モ雲ヤリヲ繪ニ書也。

一、下ノ餅ノマハリニハ、姫胡桃^(くるみ)ヲ糊ニテ平サマヲ面、細ミヲ上ヘ立ナリ。

一、二枚目ノ餅ノ皿ニハ、榎ノ實^(かや)ヲ細方ヲ上ヘシテ糊ニテ付立ナリ。

一、上ノ餅ノ皿ニハ、青大豆ヲ置き、二方ニ白キ大豆ヲ二方ニ向セ立ルナリ。

一、下ノ臺ニハゼヲ鋪ナリ。

一、昔ハ臺白木、當代ハ祝言ノ繪ヲ書也。是不苦ナリ。

饗ノ膳之事

一、饗膳之臺ハクギヤウ也。少大キニスルナリ。三方ニサマ有ルヘシ。

一、食ハ土器ニ盛也。箸之方ニ高立有、土器ノ内ノ方ニ糊ニテ立ベシ。其上ヲ紙三ツニ疊、帶結ビニスベシ。紙廣ク候ヘハ悪シ。箸之方ニ結目有也。食ハ杉鉢三ツ盛ナリ。

一、食ノ上ニ生飯有ホウシユノナリニシテ、食ヲ握テ一ツ置ク也。但シ串ニサシ置也。

一、汁ハ鯉也。梅干三ツ土器ニ入、手先ニ置、海月土器ニ入中ニ置、鰯二ツ腹ヲ合セ土器ニ入手本ニ置。但シ頭ヲ梅干ノ方ヘスルナリ。

手掛^(曲)マケ様之事

一、下之臺ノ足高サ二寸五歩。但シ六角ニマケルナリ。同折敷ノ廣サ一尺五歩四方、同フチノ高サ一寸五歩ナリ。

一、上ノ臺腰ノ高サ六寸五歩。但シ六角ナリ。折敷ノ廣

サ一尺四方、同フチノ高サ一寸五歩。但シ何モ二重ガワニマケサセルナリ。

手掛^(するめ)盛様之事

一、小鳥 鰯卷干 塩引 蒲鉾 結髪斗 串炮
右六色ノ肴ニテ六角ニ盛上ルナリ。但シ杉鉢ニ高サ八寸程ニ盛、松木ノ葉ヲ皿ニサシ、金銀ノ露ヲ置クナリ。

一、下ノ臺廻ニハゼヲ鋪ナリ。

置鳥ノ事

一、臺之高サ四寸、同長サ一尺二寸、廣サ六寸、同足ノ高サ三寸。但切目ニ付ルナリ。但臺鉢ハ鳥ナリニマケサセベシ。

鳥置様之事

一、臺之内ニ置上ヲシテ鳥ヲ高く生鳥ノコトク置クナリ。口ヨリ串ヲ指ス事口傳。但シ羽ガヘヲ臺ヨリ外ヘ出スナリ。

置鯉之事

一、臺ノ高サ四寸、同長サ一尺二寸、同廣サ五寸、同足ノ高サ三寸。但切目ニ足ヲ二所ニ付ルナリ。

盃之事

一、土器三ツ、クギヤウ小角ニ据テ置ベシ。三方ニサマヲ明ベシ。口傳重々有。

小笠原大膳太夫

長時

同 右近太夫

貞慶

小池 甚之丞

貞成

岩間 七兵衛尉

玄之

廣瀬三左衛門尉

吉孝

三好五郎左衛門尉

貞成

右此一巻当家別而為秘

事之間夢々麁相他見

他言有間敷者也

横山嘉右衛門尉

(一六七五)
延寶三乙卯

四月吉日 茂基 朱印・花押

浅利伊兵衛殿

16、兵法九字之書

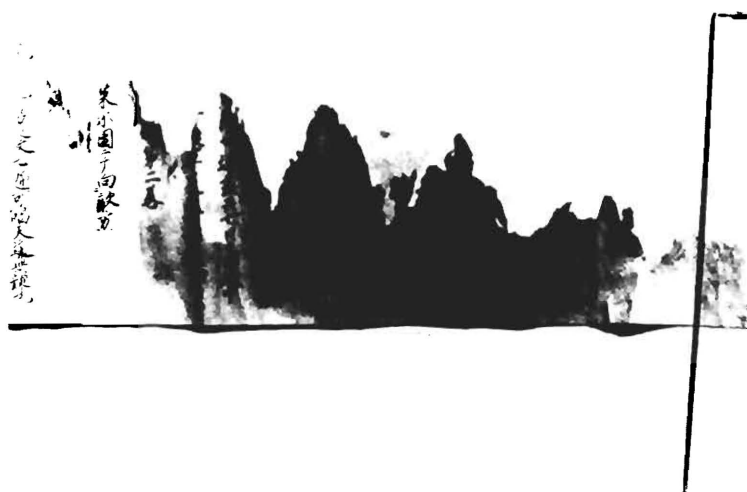
写真㊤

卷子本

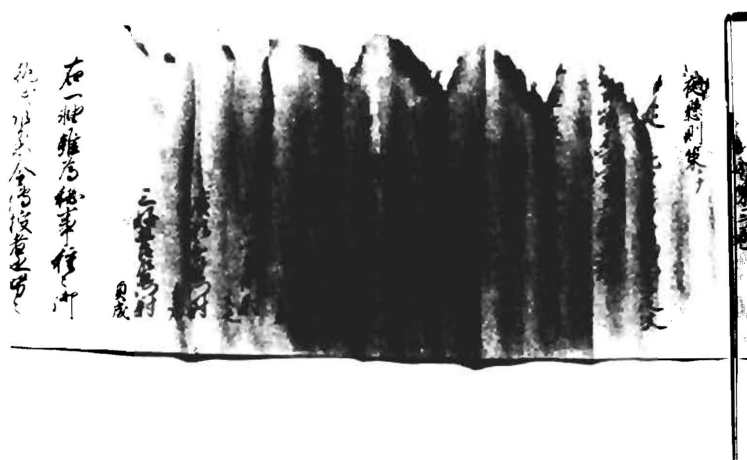
□軍監小笠原太膳太夫頼氏 在判 写真㊤

同 伊豫守 成隆 在判

同 宮内太輔氏隆 在判



写真(22) 「兵法九字之書」(仮称) 書き出しの部分。上部が大きく切れている。



写真(23) 「兵法九字之書」(仮称) の伝系の部分。

一卷

二卷

三卷

今段而此

之卷

不城之四方向

步

能文可謂本寬為教心

不滿也運畫共七日之內城中

「史」軍更不可有疑也

以天新第二卷

策亦因三向缺方

地

此字九字之文七遍可唱天道無疑也

名新第三卷

夜聽則策三

必此字書我胸九字之文

也可唱不可有其難無疑

車監崇崇原太膳全賴公在判

小笠原大膳太夫

長時

同 右近太夫

貞慶

小池 七兵衛尉

玄之

廣瀬三左衛門尉

吉孝

三好五郎左衛門尉

貞成

右一軸雖為秘事種々御

写真(24)

執心候条令傳授者也

(ゆめゆめ) 努々

麁相勿論他見他言堅有間敷

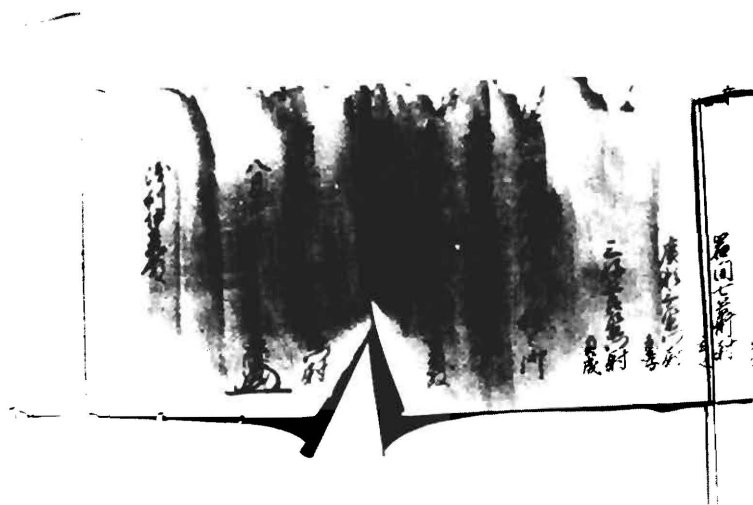
者也 仍而進覽之

(二七〇五)
寶永二乙酉

横山嘉右衛門尉

八月吉祥日

武基 朱印・花押



写真(24)「兵法九字之書」(仮称)の奥書き。文言が他と異なっている。

浅利伊兵衛殿

解説

1、最後の「兵法九字之書」の名称は仮称であるが、この「九字」とは「臨兵闘者皆陣列前行」の九字である。もと陰陽家が用いた護身の秘語で、後に兵法家にも用いられ、唱えることによって神秘の威力をあらわすと信じられていた。本文中の「九字之文七遍可唱天道無疑也」から採用した。

2、前回に引き続いて今回紹介した8から15までの伝書の年記は「延宝三_{乙卯}年（一六七五）四月」で、16の仮称「兵法九字之書」のみが「宝永二_{乙酉}（一七〇五）八月」である。前回の分と合せると、①延宝三年四月（一六七五）の年記のあるもの一巻、②元禄五年（一六九二）一二月の年記のあるもの二巻、③宝永二年（一七〇五）八月の年記のあるもの三巻と合計一六巻となる。すべて「横山嘉右衛門」より浅利伊兵衛あての伝書ではあるが、「横山嘉右衛門」の「武基」に問題がある。それは今回の「延宝三年四月」の八巻と、前回の同年記の一巻は「武基」でなく「茂基」となっており、前回の「元禄五年」の二巻と「宝永二年」の二巻及び今回の「宝永二年」の一巻が「武基」となっていることである。（写真※(4)と写真※(5)参照）

この事は『津軽藩旧記伝類・巻之八』（青森県文化財保護協会・編集及び発行、四三五頁、一九五八）等には「武基」となっているところから、改名したものと考えられる。

弓術

一、（以下三行、欠損のため不詳。）

3、吉田流雪何派弓術

写真図

卷子本

一、

一、うつほを人に可渡事

一、弦一かけ二かけといふ事

一、弦巻にまく弦数の事

一、うつほをつほといはぬ事

一、弓はりおろすといはぬ事

十

- 一、白弦一張といふ事
- 一、うつほの各所の事
- 一、(以下二行欠損のため不詳。)
- 一、
- 一、三つゆかけといふ間敷事
- 一、的射る遊かけ一つ二つと云へき事
- 一、つるの上せきの事
- 一、つるの中せきの事
- 一、四半以下立様の事
- 一、木草□□□□□やうの事
- 二十
- 一、苑以下立様の事
- 一、立間敷物の事
- 一、大のこと葉の事
- 一、小的にことはの事
- 一、丸物にこと葉の事
- 一、笠懸の的詞の事



写真(25)「吉田流雪荷派弓術」書き出しが切れている。所々に穴があき、その部分の判読は出来ない。10項目毎にまとめている。

一、弓立□□□□定る時の事

一、錢を取へき人の事

一、矢代可振人の事

一、貴人の矢代振てをかぬ所の事

三十

一、取落す弓の事

一、弦きれの事

一、かへり弓の事

一、折弓の事

一、切弦本弰(もとはず)に残る時の事

一、一張ぬ氣の事

一、下趣のしつの事

一、切弦上下に残る時の事

一、おれ矢の事

一、おれ弓かたちの事

四十

一、射放つ時弓を取はつしてうて(腕)に懸る時の事

一、弓を北と西にむかひてはらぬ事

一、貴人に弓と矢を一度に参らす事

一、ふしぬりたる矢取あつかひ様の事

一、貴人の藤□弓張様の事

一、貴人馬上の時張かへ出す様の事

一、弓と太刀折紙の奏者仕様の事

一、弓と太刀折紙にて御使に参様の事

一、弓かけをさしぬくといはぬ事

一、一貝(ゆがけ)弾かた〜といふ事

五十

一、筈こみの矢の事

一、弦巻に弦巻様の事

一、矢代矢頭の事

一、ませはきの羽付る次第の事

一、しこの詞の事

一、うつほの言葉の事

一、握革巻様の事

一、式的に大前に立弓も落弦切の事

一、大後に立弓も落弦切の事

一、矢代振人に矢代渡す時の事

六十

一、矢を人に可渡事

一、貴人に矢代持て出て置様の事

一、弦くゐしめすかたちの事

一、主人へ弓を立て参らす事

一、主江弓をよこに為参様の事

一、主へはらぬ弓為参様の事

一、主へ袋に入たる弓為参様の事

一、御主より給弓取様の事

一、徒立の時かいそへの弓持の事

一、貴人徒立の時矢を為参様の事

七十

一、貴人江替矢をまいらせ様の事

一、かけかへの矢といはぬ事

一、貴人江何矢にても可為参様の事

一、貴人江矢筒為参様の事

一、等輩の人に矢可出様の事

一、射付の小的にしろむと言事

一、的間うちやうの事

一、徒立の時弓矢を一度に可為参様の事

一、矢印する所の事

八十

一、はさミ物立様の事

一、はさミ物拵様の事

一、四半の大きさの事

一、馬上のゆかけ一具といふ事

一、ゑひらの矢の詞の事

一、うつほの矢のこと葉の事

一、弓はつして弦添えて為参様の事

一、的射時乙矢たはさむ切穴の事

一、矢つまよるともいふ事

一、矢筒の中への矢入間鋪事

九十

一、矢筒より矢取出しやうの事

一、同輩の人へ弓可渡事

一、うつほのほかハといはぬ事

一、小的の繪のいたし様の事

一、あつちの事

一、夜の的に立つくろふへき事

一、的射時甲矢返りの事

一、同乙矢射時の事

一、乙矢のきみに懸銭の事

百

一、てい／＼所勢の事

一、三つ矢の時てい／＼に射させ様の事

一、入遣て二つあたりの時の事

一、あひてしりといふ事

一、馬上のゆかけの大事の事

一、うつほに矢さす事

一、矢数十一の時狩俣二枚の事

一、矢数九枚の時狩俣二枚の事

一、矢数七枚の時かりまた二枚の事

一、矢数七枚の時狩俣三枚の事

百十

一、うつほにかりまた五枚の事

一、うつほにかふらさすやうの事

一、をし出してからと言矢の事

一、一手といふ矢の事

一、ゑひらのかふらといふ事

一、小手のかふらの事

一、はさミ物塚遠さの事

一、式の的遠さの事

一、圓物的庭遠さの事

一、草鹿的庭遠さの事

百二十

一、笠懸の遠さの事

一、的矢に付る羽の事

一、うつほに狩俣わたくりさす事

一、矢の筈さす事

一、節陰の根元の事

一、氣らくひをいむ事

一、数つかつくへき様の事

一、手矢をつきとをすといふ事

一、鳥うちの初りの事

百三十

一、天笠の弓の鳥打と言事

一、遊かけのはしまりの事
(ゆ)

一、矢頭のはしまりの事

一、藝目のはしまりの事

一、藝目一束一腰といふ腰

一、犬追物つなまハす事

一、日本の的の初まりの事

一、菖蒲をあやめの草といふ事

一、出陣の酒肴組の事

一、帰陣の酒肴組の大事

百四十

一、於合戦酒を結作法の事

一、的の始り根本の事

一、正月に弓可射始日の事

一、征矢弓の握革の事

一、人の宿所にて弓しこ置所の事

一、むかはき一束二そくといふ間敷事

一、的庭にて弓矢筒置所の事

一、征矢の節などのおほき節名所の事

一、さか羽のうちやうの事

一、貴人なとと組合たる時さか羽うちやうの事

百五十

一、しこの征矢うつほの征矢の羽たけの事

一、矢頭かりまたの柄などの四羽の事

一、犬射藝目笠懸目柄の羽たけの事

一、馬上の白木の事

一、矢代をとり直す時の事

一、矢代可振帯佩の事

一、中ハあたりて地の不付時矢代の事

一、中なき時の矢代の事

一、貴人の弓常に可持様の事

百六十

一、具足着て貴人に物申事

一、人の矢代を自然と我弓のうらにて打地らしたる時の

事

一、矢代矢頭角にてもする事

一、くつ巻の本節の事

一、三所藤の弓拵様の事

一、頼政鶴(ぬえ)を射られたる時の弓の藤のつかひやうの事

一、村重藤の事

一、夜のうつつミ火する事

一、出陣の時大將の御前へ一しゆくかためて被召出候時

の事

一、弦桶一つ二つと云へからさる事

百七十

一、弓矢にかきらす我か前の人にしつ有時の事

一、我か後の人にしつ有時の事

一、野かけにて何にても当て物の事

一、射手のけいやくと言事

一、軍陣などにて弓庭拵様の事

一、陣にて的など射時矢代の事

一、くつむかはきはきぬく事

一、矢のしつ有時別の矢を持て出す事

一、小串の立物に矢の中外の事

一、弓の起の事

百八十

一、弦の起の事

一、弓に陰陽の事

一、ぬり弓に矢摺かふら藤の事

一、矢すりかふら藤長さの事

一、弦巻の本節の事

一、弓をはつして置様の事

一、はな紙の立様の事

一、沓のたてやうの事

一、あわ(鮑)ひ具の立様の事

一、ほう(朴)かし(杓)はの葉をうつす事

百九十

一、くしのなどの時弓矢筒敷皮持ていする時の事

一、くしのと申射様の事

一、五度弓の事

一、式のくし的の時矢代ふり様又弓立に可立様の事

一、立あかりに射るやうの事

一、矢中の事

一、あたりといはぬ事

一、半的のくしの事

一、式の時射時の帯佩の事

一、圓物にあたりはつれの事

二百

一、徒立の時貴人へ張替為参様の事

一、大的の時かいそへの矢可出様の事

一、大的のせミの付様の事

一、射手の敷皮の事

一、数塚若射手のくつす時のかたちの事

一、かすつかこしらへ様の事

一、笠懸にさくりよりの遠さの事

一、笠懸串の事

一、大的の串の事

一、丸物の寸法の事

二百十

一、矢代ふるへき時ふせて置たる弓の弦切る時の事

一、ふせ鳥の矢所の事

一、丸物射る矢頭の事

一、弦桶寸法の事

一、弦に三張弦五張弦と言事

一、矢うるしの事

一、しゆ阿弥矢うるしの事

一、十二束の矢かつかうの事

一、一手矢頭をつれたるものにさくする時の事

一、射手方の寸法かねの事

二百二十

一、うつほの時分の事

一、草鹿射る矢頭の事

一、左の手を弓手と申右の手をめてと言事

一、山鳥の引尾羽取様の事

一、矢開の包丁の事

一、かゝらし張の弓持時節の事

一、はしり物射目付の事

一、人の弓いられ候を誉様の事

一、手袋の事

一、肩をぬかすして射る鳥の事

二百三十

一、的なと見物する時敷皮しく事

一、あつちを的山といはぬ事

一、数塚をはつくと云くつすと云へき事

一、十人に餘れは数塚くつすへき事

一、小的なとの時に人ましハリて射らるゝ時の事

一、的に持へき弓の事

一、野かけの的庭なくにたけをふする事

一、矢代に一手矢をかたく出す事

一、風吹などの時矢代の矢の事

一、矢代一番に振はしむへき人の事

二百四十

一、矢代おほき時分て置て可振置所の事

一、矢代可振人躰の事

一、貴人の御同輩にてあたりの事

一、貴人おちの矢代にてあたりたる時の事

一、貴人おちの時甲矢にてしつ有時前の射手の事

一、所勢なき時の矢代の事

一、矢代かミより取時の事

一、二弓立有時立様の事

一、おちにさか羽打事なき事

一、小的な時も矢取ハ一人あての事

二百五十

一、的の時弓庭にて酒ありて被召出時すわうゆかけの事

一、小的な時貴人の弓弦甲矢にて切れハ其下に立たる人の事

の事

一、矢申しやうの事

一、さかり矢の矢中の事

一、小的な時一手射中たる人の相手かさ持事

一、御的射手将束の事

一、御的弓の事

一、矢数的矢の事

一、ゆかけ可持数の事

一、御的ゆかけの指様の事

二百六十

一、出仕の次第の事

一、馬上より下て沓をはく事

一、小あかりの座に付へき事

一、式の座に可付次第の事

一、数塚へ可寄様の事

一、ひもへおさむへき様の事

一、ひたゝれの紐可納様の事

一、前後の弓足ふみの事

一、弓場に可立様の事

一、射果て引足の事

二百七十

一、相手しつあらハ射手畏と言事

一、取落す弓に三足の事

一、かへり弓の時かい添張かへ可張かへ可出様の事

一、折弓の時拵添の張かへ可出次第の事

一、雨雪の日の敷皮の事

一、射果て後着座しての次第の事

一、録を給る時参上の様の事

一、録を給る人請取様の事

一、射果て退出の事

一、射果て相手と向て禮の事

二百八十

一、数つかのたかさの事

一、数つかと言子細の事

一、ひとり弓の禮の事

一、ひとり弓に数さす事

一、雨雪の日の矢の事

一、あめ降の磔の事

一、乙矢御免の事

一、射手をせんと言事

一、射手の立所の事

一、御のおんしやうの事

二百九十

一、ゆかけのゆひをつく事

一、ゆかけにぬふましき革の事

一、弾の指当世こと革にてつく事

一、ゆかけ一具さす時の事

一、一具弾指て貴人の前へ出る時の事

一、犬追物の時こてさして貴人の前へ出る時の事

一、かち立を射る時右弾の事

一、馬上にてハいつも弾可指事

一、やふさめの時の弾さす様の事

一、軍陣のゆかけの緒留る大事

三百

一、何にてもあれ徒立にて射る時弾さし様の事

一、ゆかけ一具とはいへとも一手ゆかけとはいはぬ事

一、馬上にて一具ゆかけをさし馬方下てはさミ物なと射

時の事

一、むちハくま柳本たる事

一、むちの長さの事

一、むちのとつかの革の事

一、何鞭にてもあれとつか可有事

一、竹の根のむちの事

一、犬射時射手の鞭の事

一、鞭の緒をうてにぬき入て持事

三百十

一、紫竹の鞭をはたゝ人持間数事

一、むかはき長さの事

一、行騰起りの事

一、御所様むかはきの事

一、むかはきのこしの事

一、行騰を鞭に打懸て出る事

一、一手矢頭の拵様の事

一、矢頭すけふしとすけきわの程らひの事

一、矢頭の矢節数の事

一、矢頭のめかふの事

三百二十

- 一、一手矢頭を草に拵る事
- 一、一手四目の事
- 一、四目の寸又目の事
- 一、常の四目の事
- 一、かふら矢の拵様の事
- 一、四立の矢の時走羽に羽の事
- 一、四立の矢の篋の事
- 一、四足の矢はきの事
- 一、かふら矢にしやうすへきふしの事
- 一、かふらの矢つかの事
- 三百三十
- 一、矢束まぐといふ事
- 一、かふらのからをふしをさハしてする事
- 一、かふら矢に走羽の事
- 一、鏑のなかさの事
- 一、狩俣のからの事
- 一、征矢の拵やうの事
- 一、征矢の羽本節の事
- 一、そやの羽表し物の事
- 一、とかり矢の拵様の事
- 一、小笠懸の矢の拵様の事
- 三百四十
- 一、小笠掛のからにふし陰の事
- 一、小笠懸ひこ目の事
- 一、的矢のこしらへ様の事
- 一、的矢ぬくひ篋にもする事
- 一、矢に鷹の羽付る矢の事
- 一、山鳥の尾矢に付る事
- 一、笠懸柄の事
- 一、笠懸からの羽の事
- 一、暮目赤漆の事
- 一、暮目の矢四羽の事
- 三百五十
- 一、犬射柄をませ作にはく事
- 一、小人などの犬射柄の事
- 一、矢に三つ付る羽名本説の事

一、矢にやり羽ト云二説の事

一、うるし矯をして可持矢の事

一、墓目の本説の事

一、犬射柄の篋の事

一、犬射柄はきの事

一、鉾天征矢百矢などのふしの事

一、大的串笠懸串丸物串の木の事

三百六十

一、大的串木色の事

一、折かけくしの事

一、弓の力の事

一、弓を一力二力と言事

一、二人張三人張といふ事

一、矢束何束引と言事

一、二の矢といふ事

一、すかりまたといふ事

一、弓を主貴人に當座にはりて出す時の事

一、つねの引出物の事

三百七十

一、弓懸に弓をかくる事

一、下人うつほ付て弓可持様の事

一、うつほの上に矢頭さすへき事

一、鞭と矢頭をさす時の事

一、矢頭小者にさゝする時の事

一、矢頭我さすか小者さゝする時の事

一、小笠懸の表し物の事

一、大的丸物草鹿笠懸なども塚といふ事

一、弓返しと言間鋪事

一、矢頭を射るといはぬ事

三百八十

一、かりと言事

一、うつほにひかめると言事

一、一疋の物をは射ぬ事

一、かりくらと言事

一、こと葉にめがと可言事

一、犬むれと言事

一、しかきにたつてと言事

一、さかない馬にのりてと言事

一、里おつるものと言事

一、尾をこすものと言事

三百九十

一、鹿笛の事

一、まき目の鹿といふ事

一、おほつれ大むれ共言事

一、矢こたへにて馬を出す事

一、あらと矢こたへをする事

一、鹿にあたりたる矢の事

一、鹿に同じ様に二きも三きも矢を射付てやる時の事

一、前をきの物といふ事

一、前置の物を射ても矢こたへをして馬の足を可出事

一、前置の物射矢の事

四百

一、前置の物を臺目四目矢頭などにて射時の事

一、笛の鹿の矢所の事

一、大事の物を射に射中んと思ふ時の事

一、弓を射かへさぬ事

一、ふせ馬かけ鳥射時の矢の事

四百五ヶ條⁽¹⁾

右己上四百五ヶ條

吉田雪倚子 写真⁽⁵⁾

吉田八兵衛手前

許印可返誓紙迄極

本間流子孫印可取

鳴弦臺目弓馬相傳畢

武田吸松齋印可直傳

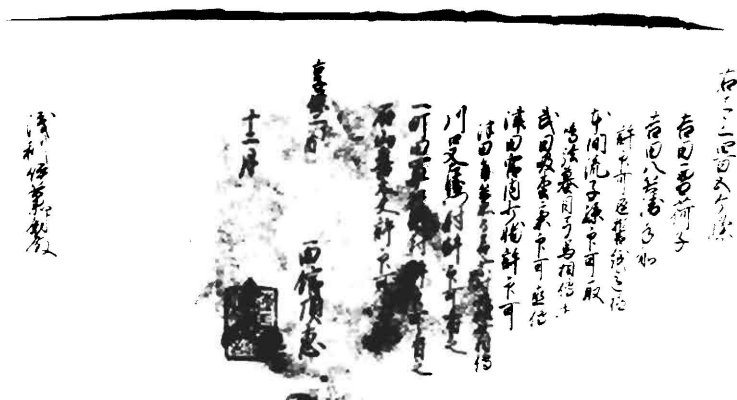
津田宮内少輔許印可

津田角兵衛与名乗時吸松齋相傳^(と)

川口又左衛門尉許印可有之⁽²⁾

一町田軍兵衛尉許印可有之⁽³⁾

石山善太夫許印可有之⁽⁴⁾



写真(26)「吉田雪荷流弓術」の奥書の部分。

(一七二七)
享保二丁酉

十二月

浅利伊兵衛尉殿

西館頂恵⁽⁵⁾
建雄 朱印・花押

注(1) 四〇五ヶ条に及ぶ伝書である。長さも八四〇センチメートルに及ぶ。

(2) 川口又左衛門。慶長——寛永(二五九六)頃の津軽藩士。寛永一〇年(一六三三)津軽第三代藩主信義が始めて江戸から弘前へ入部したとき、又左衛門は大目付役を承ったが、信義に随行してきた江戸抱えの船橋半左衛門父子が藩士の出迎えを受けても下馬しないので、その無礼をたしなめた。半左衛門父子はようやく下馬して通ったという。高八〇〇石。(東奥日報社「青森県人名大事典」一九九六)本流派の「許可印」を受けていたものと思われる。

(3) 一町田軍兵衛。一町田森季のこと。通称軍兵衛。同家四代。津軽第三代藩主信義の寛永二〇年(一六四四)家督二〇〇石を相続。その後新田を開発し、このため一〇〇石加増、弓足軽頭、目付を兼ねた。明暦三年(一六五七)没。(東奥日報社「青森県人名大事典」既出)軍兵衛に三子あり、即ち八郎左衛門(五代を継ぐ)、四郎兵衛。刑部建雄。

(4) 石山喜太夫。名は朝久。津軽第四代藩主信政の時の家

士。世禄三〇〇石。吉田流雪倚派の弓術師範。津輕藩物頭。無調法あつて正徳三年（一七一三）岡半兵衛に預けられ、享保二年（一七一七）切腹させられた。（以下略）

（東奥日報社「青森県人名大事典」既出）

(5) 西館頂恵建雄。？—享保八（一七三三）。刑部建雄のこと。津輕藩家老。津輕第四代藩主信政の時、広須新田

の取立を命ぜられ五〇石加増、天和二年（一六八二）八月用人となる。第五代藩主信寿の時、正徳元年（一七一）四月四〇〇石加増、家老となった。同二年三〇〇石加増、合せて一〇〇〇石となり西館刑部と改めた。（それまでは一町田理兵衛建雄）正徳五年（一七一五）三月御役御免、翌享保元年（一七一六）十一月隠居して頂恵と改めた。（東奥日報社「青森県人名大事典」既出）

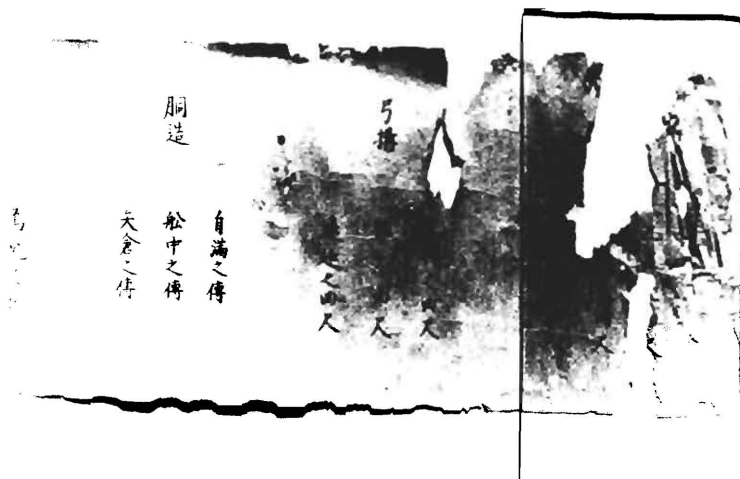
浅利伊兵衛に与えた伝書は隠居してからのものである。

4、石堂竹林流弓術 写真⑦

卷子本

三直□□□
之曲尺

□ 蛛之曲尺



写真⑦ 「石堂竹林流弓術」の書き出しの部分。右端が切れている。

		胴 造				弓 構	
烏兔之梯		矢倉之傳		船中之傳		楯之曲尺	
				自滿之傳		墨指之曲尺	
						遠近之曲尺	

離

四部之離

附切拂別券

鸚鵡之離

三生之離

以上

右依有當流弓道之志

而許與初勘之卷畢

弥可被盡精意者也

笹森勘解由左衛門⁽¹⁾

建 豊

斎 藤 新五兵衛⁽²⁾写真⁽²⁸⁾

寶曆二壬申歲^(一七五二)



写真⁽²⁸⁾「石堂竹林流弓術」の奥書きの部分。

九月

喜 儔

朱印写真※(3)
花押

八木橋左太夫殿

注(1)

笹森勘解由左衛門。津輕第四代藩主信政の時の石堂竹林流弓術の師範。本間民部左衛門匡隆の高弟。「本間民部左衛門匡隆」はもと「木村典膳」と云って紀州候に仕え禄三千石。子細あつて同士を打果し浪人、松浦鎮信候の客分であつたのを元禄十五年(一七〇二)二月津輕第四代藩主信政に禄五百石で召し抱えられ、後に二百石加増して七百石となる。三国神秘弓道の達人と云われる。(青森県文化財保護協会編「津輕藩日記伝類」三九〇頁、国書刊行会、一九八二、参照)高弟として一戸三之助、中畑孫兵衛、笹森勘解由左衛門が数えられる。

(2)

斎藤新五兵衛喜儔。笹森勘解由左衛門の高弟で石堂竹林流弓術の師範。慶長年間津輕藩初代為信に抱えられた、もと越後の浪人斎藤掃部助則の七代の孫。斎藤小左衛門喜澄の二子。享保二年(一七四二)八月隠居して「射祐」と改名。かねてから石堂竹林流弓術の皆伝が済んでいたので師範となった。明和五年(一七六八)十一月八日病死。

(青森県文化財保護協会編「津輕藩日記伝類」三九四頁、既出)

この伝書の年記が宝暦二年(一七五二)であるので隠居後の伝授であるが、まだ「射祐」を名乗っていない。

あとがき

かつて八戸市在住のとき、旧八戸藩の菩提寺・月溪山南宗寺(京都妙心寺派・臨濟宗)住職田口豊洲氏(故人)の主唱する仏教青年会に入門し、ほぼ一〇年間、禅の手ほどきを受けた。田口氏は京都花園臨濟宗大学卒業後、鎌倉円覚寺の専門道場で朝日奈宗源師について修行した人ではあるが、南宗寺の参禅会では、例年、埼玉県野火止にある平林寺の円應老師

を招き指導をいただいていた。指導をいただいていたと云えば聞えは良いが、自分の場合は、実は魂が震いあがる程鉄槌を被っていたのである。参禅とは、独り独り老師のもとに参じ、心の在り様を披歴し、厳しく点検を受けることであつた。二年目にして漸く老師から「狗子無仏性」の「公案」を呈されたが、疑着のまま弘前市に転住となつた。禅入門の前から旧八戸藩の武芸古文書を解説していたが、兵法と心法の接点に得心できず苦渋の日が続いていた。一方、刊本として沢庵の通称「不動智神妙録」、柳生宗矩の「兵法家伝書」、新免(宮本)武蔵の「五輪書」に取り組む日日であつた。しかし未だ未だ殆ど得心できなかった。八戸市から弘前市に移る頃、その接点の模様について、少しは明るくなったという気がしていた。

今回、弘前藩士、当田流太刀の修行者と思われる戸田茂太夫の筆写本「剣術心法神妙録」を判読し、その原典「不動智神妙録」に再び相対し、また相接することとなつた。

いま自分にとって「不動智神妙録」とは、兵法と心法の接点を説く書というより、兵法と心法の融合の在り様について、繰り返し繰り返し、懇切丁寧に噛み砕いて説いている書と受け止めている。ただしこの説き方は、仏道から先ず心の在り様を、次いで「貴殿(柳生宗矩)の兵法にて申すべく候」とか「貴殿の兵法にとたへて申せば」というように兵法の在り様を例示し、そのことによって両者の融合性・一如性の開眼を期待する方法である。これは「不動智神妙録」の特徴といつてよいのかも知れない。この方法は注意しておかなければならない。確かに柳生宗矩は、沢庵を師として兵法と心法に開眼し、「兵法家伝書」を書き残した。以来この書は「柳生新陰流」の典範となつた。

しかし、例えば右の次第のように禅僧を師とし、諄諄と説く心法に一度も接することなく、ひたすら兵法の至極を求めて、その果てにおのずから兵法・心法の融合一如に開眼し、自由活達な心境に達した兵法家もいる。その代表的人物として新免(宮本)武蔵を挙げることができる。武蔵は「五輪書」「地の巻」に「(前略)我三十を越えて跡をお

もひ見るに、兵法至極してかつにはあらず。をのづから道の器用ありて天理をはなれざる故か、又は他流の兵法不足なる所にや。その後なおもふかき道理を得んと朝鍛夕鍛してみれば、をのづから兵法の道にあふ事、我五十歳の比なり。夫より以来は尋入るべき道なくして光陰を送る。兵法の理にまかせて、諸芸諸能の道となせば、万事におゐて我に師匠なし。(以下略)と書き残した。

兵法はもともと、命の断涯に立つて始めて生み出すことのできる術技の体系であり、その過程は、いわば心法の深まりと表裏一体をなす。それ故に、武蔵の「をのづから兵法の道にあふ事」の「兵法」と、「兵法の理にまかせて」の「兵法」の語は、「心法」の語と置き換えてもよく、これは武蔵の融合一如を示す貴重な一語と云わなければならない。彼は「兵法の理にまかせて」書に親しみ絵を書き、仏像を彫った。

武蔵の『五輪書』の年記は正保二年(一六四五)、そして同年没。宗矩の『兵法家伝書』の年記は正保三年(一六四六)、そして同年没。両者とも死線をのり越えた実戦の経歴をもち、兵法をもって生涯を送った同時代人である。しかし、宗矩は徳川家兵法師範となり、師・沢庵の『不動智神妙録』をひとつの契機として開眼し、武蔵は野に下りながら兵法に身を沈めることによつて遂に開眼した。その生きざまは甚しく異なるにせよ、両者は兵法・心法の融合一如を極めた天下の双壁であった。

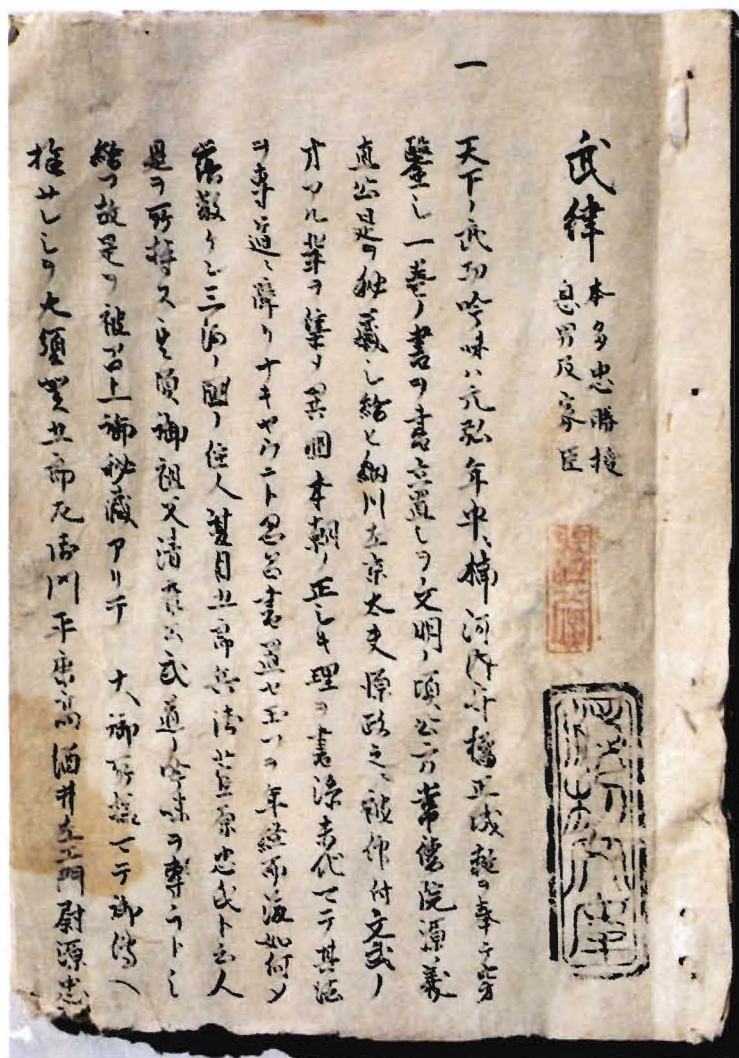
『不動智神妙録』が「剣の至妙の境地は禅のそれと一致するという、いわゆる剣禅一如の思想を多くの事例を挙げて説いた法論であり、剣禅一如、弓禅一如など、あらゆる武芸や芸能の一つの思想的ルーツ」であると、今村嘉雄の同書の解説の一節を引用して先に述べた。このことは間違いでないとしても、同時にまた『五輪書』を挙げ、異なる道程をたどった新免(宮本)武蔵の生きざまに凝視する必要のあることにも触れておなければならないだろうと思う。

また、『不動智神妙録』が宗矩の兵法開眼の契機となり得たのは、宗矩自身に沢庵の説く心法の真意を受けとめるだ

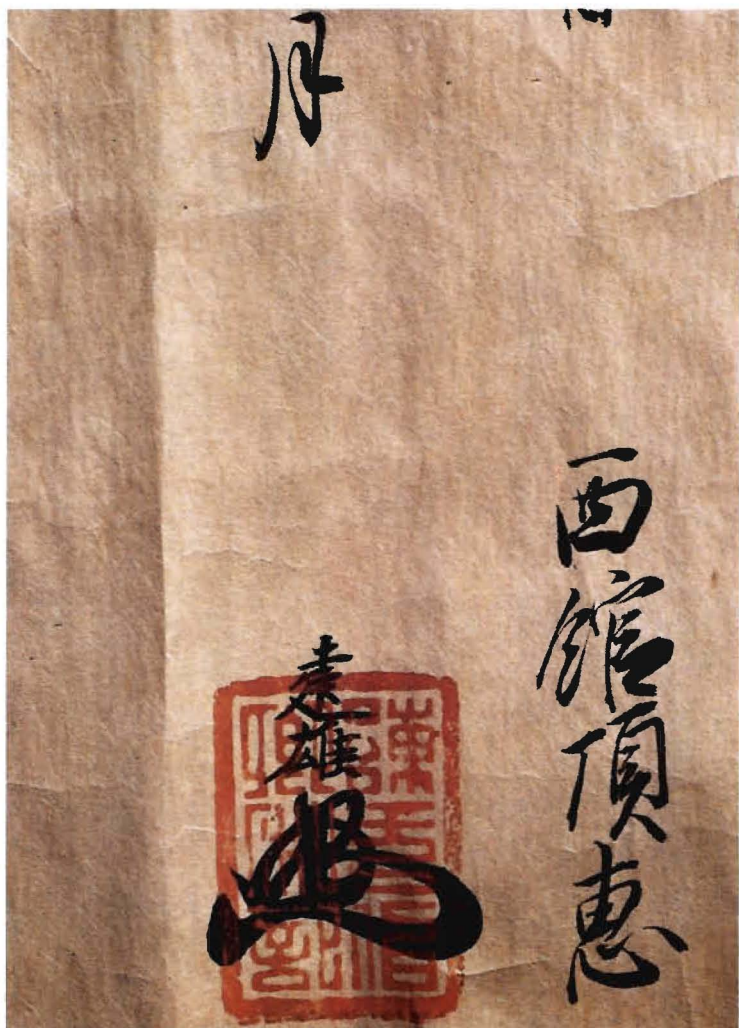
けの高い術技と、それを更に高めながら自分の工夫開発した術技をも含めて、柳生新陰流の全体系作りに日夜腐心していたという実態があつたからに外ならない。

今回紹介した資料のうち『剣術心法神妙録』の原典、通称『不動智神妙録』をとりあげ、私事を混えて所見の一端を述べてあとがきとした次第である。

(一九九〇年十一月五日)



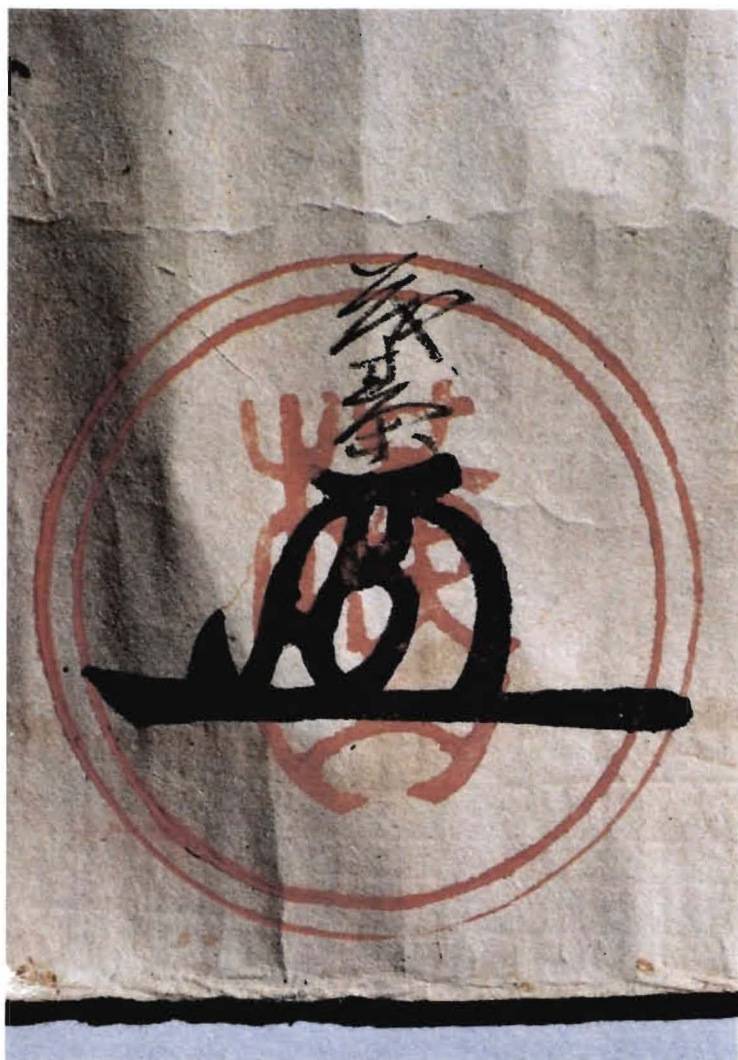
写真※(1) 『武律』の書き出しの頁。「浅利文庫」の印は認められるが、その上の印文は読み難い。



写真※(2)「古田流雪倚派弓術」西館頂恵建雄の
朱印・花押。



写真※(3)「石堂竹林流弓術」斎藤新五兵衛喜備の
朱印と花押。



写真※(4) 「茂基」を示す「横山」の朱印と花押。



写真※(5) 「武基」を示す「横山」の朱印と花押。